

硝子戸の中

夏目漱石

—

硝子戸ガラスどの中うちから外を見渡すと、

霜除しもよけをした芭蕉ばしやうだの、赤い実みの結なつ

た梅もどきの枝だの、無遠慮に直

立した電信柱だのがすぐ眼に着く

が、その他にこれと云って数え立てるほどのものはほとんど視線に入^こって来ない。書斎にいる私の眼界^{きわ}は極めて単調でそうしてまた極めて狭いのである。

その上私は去年の暮から風邪^{かぜ}を引いてほとんど表へ出^でずに、毎日この硝子戸の中^{すわ}にばかり坐^{すわ}っている。世間の様子はちつとも分らない。心持が悪いから読書もあ

まりしない。私はただ坐つたり寝たりしてその日その日を送っているだけである。

しかし私の頭は時々動く。気分も多少は変る。いくら狭い世界の中でも狭いなりに事件が起つて来る。それから小さい私と広い世の中とを隔離しているこの硝子戸の中へ、時々人が入つて来る。それがまた私にとっては思いがけない

人で、私の思いがけない事を云つたり為^したりする。私は興味に充^みちた眼をもつてそれらの人を迎えた
り送^つたりした事さえある。

私はそんなものを少し書きつづけて見ようかと思う。私はそうした種類の文字^{もんじ}が、忙^{まじ}がしい人の眼に、どれほどつまらなく映るだろ
うかと懸^け念^{ねん}している。私は電車の
中でポケットから新聞を出して、

大きな活字だけに眼を注いでいる
購読者の前に、私の書くような閑
散な文字を列べて紙面をうづめて
見せるのを恥ずかしいものの一つ
に考える。これらの人々は火事や、
泥棒や、人殺しや、すべてその日
その日の出来事のうちに、自分が
重大と思う事件か、もしくは自分
の神経を相当に刺戟し得る辛辣な
記事のほかには、新聞を手取る

必要を認めていないくらい、時間に余裕をもたないのだから。

彼らは停留所で電車を待ち合わせる間に、新聞を買って、電車に乗っている間に、昨日きのう起った社会の変化を知って、そうして役所か会社へ行き着くと同時に、ポケットに収めた新聞紙の事はまるで忘れてしまわなければならないほど忙がしいのだから。

私は今これほど切りつめられた
時間しか自由にできない人達の軽^{けい}
蔑^{べつ}を冒^{おか}して書くのである。

去年から欧州では大きな戦争が
始まっている。そうしてその戦争
がいつ済むとも見当^{けんとう}がつかない模
様である。日本でもその戦争の一
小部分を引き受けた。それが済む
と今度は議会が解散になった。来^{きた}
るべき総選挙は政治界の人々にとつ

ての大切な問題になっている。米
が安くなり過ぎた結果農家に金が
入らないので、どこでも不景気だ
と零こぼしている。年中行事で云えば、
春の相撲すもうが近くに始まるうとして
いる。要するに世の中は大変多事
である。硝子戸の中にじつと坐っ
ている私などはちよつと新聞に顔
が出せないような気がする。私が
書けば政治家や軍人や実業家や相すも

撲狂^{うつきやう}を押し退^おけて書く事になる。

私だけではとてもそれほどの胆力
が出て来ない。ただ春に何か書い
て見ると云われたから、自分以外
にあまり関係のないつまらぬ事を
書くのである。それがいつまでつ
づくかは、私の筆の都合^{つごう}と、紙面
の編輯^{へんしゅう}の都合とできまるのだから、
判然^{はつきり}した見当は今つきかねる。

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがって用事を訊いてみると、ある雑誌社の男が、私の写真を貰いたいのだが、いつ撮りに行って好いか都合を知らしてくれろというのである。私は「写真は少し困ります」と答えた。

私はこの雑誌とまるで関係をもつ

ていなかっただ。それでも過去三四年の間にその一二冊を手にした記憶はあつた。人の笑っている顔ばかりをたくさん載^のせるのがその特色だと思つたほかに、今は何にも頭に残っていない。けれどもそこにわざとらしく笑っている顔の多くが私に与えた不快の印象はいまだに消えずにいた。それで私は断^{こと}わろうとしたのである。

雑誌の男は、卯年うとしの正月号だから卯年の人の顔を並べたいのだという希望を述べた。私は先方のいう通り卯年の生れに相違なかつた。それで私はこう云った。

「あなたの雑誌へ出すために撮とる写真は笑わなくつてはいけないでしょう」

「いえそんな事はありません」と相手はすぐ答えた。あたかも私が

今までその雑誌の特色を誤解して
いたごとくに。

「当り前の顔で構いませんなら載
せていただいても宜^{よろ}しゅうござい
ます」

「いえそれで結構でござい
ますが、」

私は相手と期日の約束をした上、
電話を切った。

なかいちにち
中一日おいて打ち合せをした時

間に、電話をかけた男が、綺麗な
洋服を着て写真機を携たづなえて私の書
斎に這はい入いつて来た。私はしばらく
その人と彼の従事している雑誌に
ついて話をした。それから写真を
二枚撮とつて貰もらった。一枚は机の前
に坐まっている平生の姿、一枚は寒
い庭前にわさきの霜しもの上に立たっている普通
の態度であつた。書斎は光線がよ
く透とおらないので、機械きがいを据すえつけ

てからマグネシアを燃^もした。その
火の燃えるすぐ前に、彼は顔を半
分ばかり私の方へ出して、「御約
束ではございますが、少しどうか
笑っていたただけですまいか」と云っ
た。私はその時突然微^{かす}かな滑稽^{こっけい}を
感じた。しかし同時に馬鹿な事を
いう男だという気もした。私は
「これで好いでしょう」と云った
なり先方の注文には取り合わなかつ

た。彼が私を庭の木立こたちの前に立た
して、レンズを私の方へ向けた時
もまた前と同じような鄭寧ていねいな調子
で、「御約束ではございますが、
少しどうか……」と同じ言葉を繰く
り返かえした。私は前よりもなお笑う
気になれなかった。

それから四日ばかり経たつと、彼
は郵便で私の写真を届けてくれた。
しかしその写真はまさしく彼の注

文通りに笑っていたのである。その時私は中が外れた人のように、しばらく自分の顔を見つめていた。私にはそれがどうしても手を入れず、て笑っているように拵えたもの^{いじ}としか見えなかつたからである。

私は念のため家へ来る四五人のものにその写真を出して見せた。彼らはみんな私と同様に、どうも作って笑わせたものらしいという

鑑定を下^{くだ}した。

私は生れてから今日^{こんにち}までに、人の前で笑いたくもないのに笑って見せた経験が何度となくある。その偽^{いつわ}りが今この写真師のために復^{ふくし}讐^{ゆづ}を受けたのかも知れない。

彼は気味のよくない苦笑を洩^もらしている私の写真を送ってくれたけれども、その写真を載せると云った雑誌はついに届けなかった。

私がHさんからヘクターを買った時の事を考えると、もういつの間にか三四年の昔になっている。何だか夢のような心持もする。

その時彼はまだ乳離れのしたばかりの小供であつた。Hさんの御弟子は彼を風呂敷ふろしきに包んで電車に載のせて宅うちまで連れて来てくれた。

私はその夜彼を裏の物置の隅すみに寝かした。寒くないように藁わらを敷いて、できるだけ居心地の好い寝床ねどこを拵いしらえてやったあと、私は物置の戸を締めた。すると彼は宵よいの口くちから泣き出した。夜中には物置の戸を爪で掻き破つて外へ出ようとした。彼は暗い所にたったひとりひと寝るのが淋しかったのだらう、翌あく朝あさまでまんじりともしない様子であつ

た。

この不安は次の晩もつづいた。

その次の晩もつづいた。私は一週

間余りかかって、彼が与えられた

藁の上にようやく安らかに眠るよ

うになるまで、彼の事が夜になる

と必ず気にかかった。

私の小供は彼を珍らしがって、

間がな隙がな玩弄物にした。けれ

ども名がないのでついに彼を呼ぶ

事ができなかつた。ところが生き
たものを相手にする彼らには、是
非とも先方の名を呼んで遊ぶ必要
があつた。それで彼らは私に向つ
て犬に名を命付けてくれとせがみ出
した。私はとうとうヘクターとい
う偉い名を、この小供達の朋友ほしゅうに
与えた。

それはイリアッドに出てくるト
ロイ一の勇将の名前であつた。ト

ロイと希臘ギリシャと戦争をした時、ヘクトーはついにアキリスのために打たれた。アキリスはヘクトーに殺された自分の友達の讐かたきを取ったのである。アキリスが怒いかって希臘方がたから躍おどり出した時に、城の中に逃げ込まなかつたものはヘクトー一人であつた。ヘクトーは三たびトロイの城壁をめぐるつてアキリスの鋒先ほうせんを避けた。アキリスも三たび

トロイの城壁をめぐってその後あとを
追いかけた。そうしてしまいにと
うとうへクトーを槍やりで突き殺した。
それから彼の死骸しがいを自分の軍車チャリオットに
縛しばりつけてまたトロイの城壁を三
度引き摺ひり廻ずした。……

私はこの偉大な名を、風呂敷包
にして持って来た小さい犬に与え
たのである。何にも知らないはず
の宅うちの小供も、始めは変な名だな

あと云っていた。しかしじきに慣れた。犬もヘクトーと呼ばれるたびに、嬉しうれそうに尾を振った。しまいにはさすがの名もジョンとかジョージとかいう平凡な耶蘇教信者ヤソキョウシンジの名前と一様に、毫ごうも古典クラシカル的な響を私に与えなくなつた。同時に彼はしだいに宅のものから元もとほど珍重されないようになった。

ヘクトーは多くの犬がたいてい

罹^{かか}るジステンパーという病気のた
めに一時入院した事がある。その
時は子供がよく見舞^{みまい}に行つた。私
も見舞に行つた。私の行つた時、
彼はさも嬉しそうに尾を振つて、
懐^{なつ}かしい眼を私の上に向けた。私
はしゃがんで私の顔を彼の傍^{そば}へ持つ
て行つて、右の手で彼の頭を撫^なで
てやつた。彼はその返礼に私の顔
を所嫌^{うじまる}わず舐^なめようとしてやまな

かった。その時彼は私の見ている
前で、始めて医者すずの勧める少量の
牛乳を呑のんだ。それまで首を傾かしげ
ていた医者も、この分ならあるい
は癒なおるかも知れないと云った。へ
クトーははたして癒った。そうし
て宅うちへ帰って来て、元気に飛び廻っ
た。

四

日ならずして、彼は二三の友達
を拵いじりえた。その中うちで最も親しかつ
たのはすぐ前の医者いしやの宅たくにいる彼
と同年輩どうねいぐらいの悪戯いたずら者ものであつた。
これは基督キリスト教徒ききうとに相応ふさわしいジヨン
という名前なまえを持つていたが、その
性質せいしやうは異端いたん者しやのへクトーはるかよりも遙
に劣おとつていたようである。むやみ
に人に噛かみつく癖くせがあるので、し
まいにはとうとう打ち殺ころされてし

まった。

彼はこの悪友を自分の庭に引き入れて勝手な狼藉ろうぜきを働らいて私を困らせた。彼らはしきりに樹の根を掘って用もないのに大きな穴を開あけて喜んだ。綺麗きれいな草花の上にわざと寝転ねころんで、花も茎も容赦ようじやなく散らしたり、倒したりした。

ジョンが殺されてから、無聊ぶりような彼は夜遊よあそび昼遊ひるあそびを覚えるように

なつた。散歩などに出かける時、
私はよく交番の傍そばに日向ひなたぼっこを
している彼を見る事があつた。そ
れでも宅にさえいれば、よくうさ
ん臭いものに吠ほえついて見せた。
そのうちで最も猛烈に彼の攻撃を
受けたのは、本所辺から来る十歳とお
ばかりになる角兵衛獅子かくべえじしの子であつ
た。この子はいつでも「今日こんにちは御
祝い」と云つて入つて来る。そう

して家の者うちから、麵麩パンの皮と一銭
銅貨を貰わない。うちは帰らない事
に一人できめていた。だからへク
トーがいくら吠えても逃げ出さな
かった。かえってへクトーの方が、
吠えながら尻尾しっぽを股またの間に挟はさんで
物置の方へ退却するのが例になっ
ていた。要するにへクトーは弱虫
であった。そうして操行からいう
と、ほとんど野良犬のらいぬと扱えらぶところ

のないほどに墮落していた。それでも彼らに共通な人懐ひとなつつこい愛情はいつまでも失わずにいた。時々顔を見合せると、彼は必かならず尾を掉ふつて私に飛びついて来た。あるいは彼の背を遠慮なく私の身体からだに擦すりつけた。私は彼の泥足のために、衣服がいとうや外套よごを汚した事が何度あるか分らない。

去年の夏から秋へかけて病気を

した私は、一カ月ばかりの間あいだついにヘクターに会う機会を得ずに過ぎた。病やまいがようやくおこた怠たつて、床とこの外へ出られるようになってから、私は始めて茶の間の縁えんに立って彼の姿を宵闇よいやみの裡うちに認めた。私はすぐ彼の名を呼んだ。しかし生垣いけがきの根にじつとうづくまっている彼は、いくら呼んでも少しも私の情けなさに
応じなかつた。彼は首も動かさず、

尾も振らず、ただ白い塊かたまりのまま垣根にこびりついてるだけであつた。私は一カ月ばかり会わないうちに、彼がもう主人の声を忘れてしまつたものと思つて、微かすかな哀愁あいしゆうを感じずにはいられなかつた。

まだ秋の始めなので、どこの間まの雨戸も締めしめられずに、星の光が明け放たれた家の中からよく見られる晩であつた。私の立っていた

茶の間の縁には、家のものが二三
人いた。けれども私がへくトーの
名前を呼んでも彼らはふり向きも
しなかった。私がへくトーに忘れ
られたごとくに、彼らもまたへく
トーの事をまるで念頭に置いてい
ないように思われた。

私は黙って座敷へ帰って、そこ
に敷いてある布団ふとんの上に横になっ
た。病後の私は季節に不相当な黒くろは

八丈ちじょうの襟えりのかかった銘仙めいせんのどてら
を着ていた。私はそれを脱ぐのが
面倒だから、そのまま仰向あおもむけに寝て、
手を胸の上で組み合せたなり黙つ
て天井てんじょうを見つめていた。

五

あくるあさ
翌朝書斎の縁に立って、
はつあき
初秋の
庭おもての面を見渡した時、私は偶然ま

た彼の白い姿を苔こけの上に認めた。

私は昨夕ゆうべの失望を繰くり返かえすのが厭いや

さに、わざと彼の名を呼ばなかつ

た。けれども立たつたなりじつと彼

の様子を見守らずにはいられなかつ

た。彼は立木たちきの根方ねがたに据すえつけた

石の手水鉢ちようずばちの中に首を突き込んで、

そこに溜たまっている雨水あまみずをびちやび

ちや飲んでいた。

この手水鉢はいつ誰が持って来

たとも知れず、裏庭の隅すみに転ころがつ
ていたのを、引越した当時植木屋
に命じて今の位置に移させた六角ろっかく
形がたのもので、その頃は苔こけが一面に
生はえて、側面に刻みつけた文字もんじも
全く読めないようになっていた。
しかし私には移す前一度判然はつきりとそ
れを読んだ記憶があつた。そうし
てその記憶が文字として頭に残ら
ないで、変な感情としていまだに

胸の中を往来していた。そこには寺と仏と無常の匂においが漂ただよっていた。

ヘクトーは元気なさそうに尻尾しっぽを垂れて、私の方へ背中を向けていた。手水鉢を離れた時、私は彼の口から流れる垂涎よだれを見た。

「どうかしてやらないといけない。病気だから」と云って、私は看護婦かえりを顧みた。私はその時まだ看護婦を使っていたのである。

私は次の日も木賊とくさの中に寝ている彼を一目見た。そうして同じ言葉を見つめて繰り返した。しかしヘクトーはそれ以来姿を隠した。ぎり再び宅うちへ帰って来なかった。

「医者へ連れて行くつもりで、探したけれどもどこにもおりません」

家うちのものはこう云って私の顔を見た。私は黙っていた。しかし腹

の中では彼を貰い受けた当時の事
さえ思い起された。届書とどけしょを出す時、
種類あいのこという下へ混血児と書いたり、
色あかまだらという字の下へ赤斑と書いた滑こつ
稽けいも微かすかに胸に浮んだ。

彼がいなくなつて約一週間も経たつ
たと思う頃、一二丁へだた隔へだつたある人
の家から下女が使に來た。その人
の庭にある池の中に犬の死骸しがいが浮
いているから引き上げて頸輪くびわを改

ためて見ると、私の家の名前が彫^ほりつけてあったので、知らせに來たというのである。下女は「こちらで埋^うめておきましようか」と尋ねた。私はすぐ車夫^{くるまぢ}をやって彼を引き取らせた。

私は下女をわざわざ寄こしてくれた宅^{うち}がどこにあるか知らなかった。ただ私の小供の時分から覚えている古い寺の傍^{そば}だろうとばかり

考えていた。それは山鹿素行やまがそこうの墓のある寺で、山門の手前に、旧幕時代の記念のように、古い榎えのきが一本立っているのが、私の書斎の北の縁から数多あまたの屋根を越してよく見えた。

車夫は筵むしろの中にヘクトーの死骸を包くるんで帰って来た。私はわざとそれに近づかなかつた。白木しらきの小さい墓標を買って来こさせて、それ

へ「秋風の聞えぬ土に埋^うめてやりぬ」という一句を書いた。私はそれを家^{うち}のものに渡して、へクトーの眠っている土の上に建てさせた。彼の墓は猫の墓から東北^{ひがしきた}に当って、ほぼ一間ばかり離れているが、私の書斎の、寒い日の照らない北側の縁に出て、硝子^{ガラス}戸のうちから、霜^{しも}に荒された裏庭を覗^{のぞ}くと、二つともよく見える。もう薄黒く朽^くち

かけた猫のに比べると、ヘクター
のはまだ生々なまなましく光っている。し
かし間もなく二つとも同じ色に古
びて、同じく人の眼につかなくな
るだろう。

六

私はその女に前後四五回会った。
始めて訪ねたずられた時私は留守るすで

あつた。取次のものが紹介状を持つて来るように注意したら、彼女は別にそんなものを貰う所がないと
いつて帰つて行つたそうである。

それから一日ほど経つて、女は手紙で直接じかに私の都合を聞き合せに来た。その手紙の封筒から、私は女がつい眼と鼻の間に住んでい
る事を知つた。私はすぐ返事を書いて面会日を指定してやつた。

女は約束の時間を違えず来た。

三つ柏の紋のついた派出な色の縮

緬の羽織を着ているのが、一番先

に私の眼に映った。女は私の書い

たものをたいてい読んでいるらし

かった。それで話は多くそちらの

方面へばかり延びて行った。しか

し自分の著作について初見の人か

ら賛辞ばかり受けているのは、あ

りがたいようではなはだこそばゆ

いものである。実をいうと私は辟^{へき}易^{えき}した。

一週間おいて女は再び来た。そうして私の作物^{さくぶつ}をまた賞^ほめてくれた。けれども私の心はむしろそういう話題を避けたがっていた。三度目に来た時、女は何かに感激したものと見えて、袂^{たもと}から手帛^{ハンケチ}を出して、しきりに涙を拭^{ぬぐ}った。そうして私に自分のこれまで経過して

来た悲しい歴史を書いてくれない
かと頼んだ。しかしその話を聴か
ない私には何という返事も与えら
れなかった。私は女に向って、よ
し書くにしたところで迷惑を感じず
る人が出て来はしないかと訊いて
見た。女は存外判然はつきりした口調で、
実名じつみょうさえ出さなければ構わないと
答えた。それで私はとにかく彼女
の経歴を聴くために、とくに時間

を拵いじしらえた。

するとその日になって、女は私に会いたいという別の女の人を連れて来て、例の話はこの次に延ばして貰もらいたいと云った。私には固もとより彼女の違約を責める気はなかった。二人を相手に世間話をして別れた。

彼女が最後に私の書斎すわに坐すわったのはその次の日の晩であつた。彼

女は自分の前に置かれた桐きりの手焙てあぶりの灰を、真鍮しんちゆうの火箸ひばしで突ツつきながら、悲しい身の上話を始める前、黙っている私にこう云った。

「この間は昂奮こうふんして私の事を書いていただきたいように申し上げましたが、それは止やめに致します。ただ先生に聞いていただくだけにしておきますから、どうかそのおつもりで……」

私はそれに対してこう答えた。

「あなたの許諾を得ない以上は、

たといどんなに書きたい事柄ことがから出

て来てもけっして書くきづかい気遣きづかいはあり

ませんから御安心なさい」

私が十分な保証を女に与えたの

で、女はそれではと云って、彼女

の七八年前からの経歴を話し始め

た。私は默然もくねんとして女の顔を見守っ

ていた。しかし女は多く眼を伏せ

て火鉢ひばちの中ばかり眺めていた。そして綺麗な指きれいなさきで、真鍮まねの火箸を握っては、灰の中へ突き刺した。

時々腑ふに落ちないところが出て

くると、私は女に向って短かい質問をかけた。女は単簡たんかんにまた私の

納得なっとくできるように答をした。しか

していたいは自分一人で口を利きいていたので、私はむしろ木像のようじつとしているだけであつた。

やがて女の頬は熱^{ほて}つて赤くなつた。
白粉^{おしろい}をつけていないせいか、
その熱つた頬の色が著るしく私の
眼に着いた。俯向^{うつむき}になつているの
で、たくさんある黒い髪の毛も自
然私の注意を惹^ひく種になつた。

七

女の告白は聴いている私を息苦

しくしたくくらいに悲痛を極めたも
のであつた。彼女は私に向つてこ
んな質問をかけた。

「もし先生が小説を御書きになる
場合には、その女の始末をどうな
さいますか」

私は返答に窮した。

「女の死ぬ方がいいと御思いな
りますか、それとも生きてい
るよ
うに御書きになりますか」

私はどちらにでも書けると答え
て、暗あんに女の気色けしきをうかがった。

女はもつと判然あいさつした挨拶を私から
要求するように見えた。私は仕方
なしにこう答えた。

「生きるという事を人間の中心点
として考えれば、そのままにして
いて差支さしつかえないでしょう。しかし美
くしいものや気高けだかいものを一義に
おいて人間を評価すれば、問題が

違つて来るかも知れませんが」

「先生はどちらを御^{おえら}択びになりま
すか」

私はまた躊躇^{ちゆうちゆう}した。黙つて女の
いう事を聞いているよりほかに仕
方がなかった。

「私は今持つているこの美しい心
持が、時間というもののためにな
んだん薄れて行くのが怖^{こわ}くつてた
まらないのです。この記憶が消え

てしまつて、ただ漫然と魂の抜殻ぬけがらのよつに生きている未来を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくつてたまらないのです」

私は女が今広い世間せかいの中にたつ

た一人立つて、一寸いっすんも身動きの
きない位置にいる事を知つていた。
そうしてそれが私の力でどうする
訳にも行かないほどに、せつぱつ
まつた境遇である事も知つていた。

私は手のつけようのない人の苦痛
を傍観する位置に立たせられてじつ
としていた。

私は服薬の時間を計るため、客
の前も憚はばからず常に袂時計たもとどけいを座蒲ざぶと
団んの傍わきに置く癖くせをもっていた。

「もう十一時だから御帰りなさい」
と私はしまいに女に云った。女は
厭いやな顔もせず立ち上った。私は
また「夜が更ふけたから送って行っ

て上げましよう」と云つて、女と共に沓脱くつぬぎに下りた。

その時美しくしい月が静かな夜よを
残る隈くまなく照らしていた。往来へ
出ると、ひっそりした土の上にひ
びく下駄げたの音はまるで聞こえなかつ
た。私は懐手ふとじろでをしたまま帽子も被かぶ
らずに、女の後あとに跟ついて行つた。
曲り角の所で女はちよつと会釈えしやくし
て、「先生に送つていただいては

もつたいのうぐざいます」「と云つた。「もつたいない訳がありません。同じ人間です」と私は答えた。

次の曲り角へ来たとき女は「先生に送っていたただくのは光栄でございます」とまた云った。私は

「本当に光栄と申しますか」と真^ま面目^{じめ}に尋ねた。女は簡単に「思います」とはつきり答えた。私は

「そんなら死なずに生きていらっ

しやい」と云った。私は女がこの言葉をどう解釈したか知らない。

私はそれから一丁ばかり行つて、

また宅うちの方へ引き返したのである。

むせつぽいような苦しい話を聞かされた私は、その夜かえつて人間らしい好い心持を久しぶりに経験した。そうしてそれが尊たうとい文芸上の作物さくぶつを読んだあとの気分と同じものだという事に気がついた。

有樂座や帝劇へ行つて得意になつていた自分の過去の影法師が何となく浅ましく感ぜられた。

八

不愉快に充みちた人生をとぼとぼ
辿たどりつつある私は、自分のいつか
一度到着しなければならぬ死と
いう境地について常に考えている。

そうしてその死というものを生よりは楽なものだとばかり信じている。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思つ事もある。

「死は生よりも尊たつとい」

こういふ言葉が近頃では絶えず私の胸を往來おうらいするようになった。

しかし現在の私は今まのあたりに生きてゐる。私の父ふ母ぼ、私の祖そ

いう狭い区域のなかでばかり、私は人類の一人いちにんとして他の人類の一人に向わなければならぬと思う。すでに生の中に活動する自分を認め、またその生の中に呼吸する他人を認める以上は、互いの根本義はいかに苦しくてもいかに醜くてもこの生の上に置かれたものと解釈するのが当り前であるから。

「もし生きているのが苦痛なら死

んだら好いでしょ」

こうした言葉は、どんなに情ななさけ

く世を観ずる人の口からも聞き得

ないだろう。医者などは安らかな

眠おもに赴おもむこととする病人に、わざ

と注射の針を立てて、患者の苦痛

を一刻でも延ばす工夫を凝こらして

いる。こんな拷問こうもんに近い所作しよふが、

人間の徳義として許されているの

を見て、いかに根強く我々が生

の一字に執着しゅうちやくしているかが解る。
私はついにその人に死をすすめる
事ができなかつた。

その人はとても回復の見込みの
つかないほど深く自分の胸を傷けきず
られていた。同時にその傷が普通
の人の経験にないような美しくしい
思い出の種となつてその人の面をおもて
輝やかしていた。

彼女はその美しくしいものを宝石

のごとく大事に永久彼女の胸の奥
に抱き締め^だていたが^しった。不幸に
して、その美しくしいものはとりも
直さず彼女を死以上に苦しめる手^{てき}
傷^ずそのものであ^つた。二つの物は
紙の裏表のごとくと^うつてい引き離
せないのである。

私は彼女に向^つて、すべてを癒^いや
す「時」の流れに従^つて下^{くだ}れと云^つ
た。彼女はもしそうしたらこの大

切な記憶がしだいに剥はげて行くだ
ろうと嘆いた。

公平な「時」は大事な宝たからもの物を彼
女の手から奪う代りに、その傷口
もしだいに療治してくれるのであ
る。烈はげしい生の歡喜を夢のように
暈ぼかしてしまおうと同時に、今の歡喜
に伴なう生なまなま々しい苦痛も取とり除のけ
る手段を怠おこたらないのである。

私は深い恋愛に根ざしている熱

烈な記憶を取り上げても、彼女の
創口から滴る血潮を「時」に拭わ
しめようとした。いくら平凡でも
生きて行く方が死ぬよりも私から
見た彼女には適当だったからであ
る。

かくして常に生よりも死を尊い
と信じている私の希望と助言は、
ついにこの不愉快に充ちた生とい
うものを超越する事ができなかつ

た。しかも私にはそれが実行上における自分を、凡庸ほんような自然主義者として証拠しょうこ立てたように見えてならなかった。私は今でも半信半疑の眼でじつと自分の心を眺めている。

九

私が高等学校にいた頃、比較的

親しく交際つきあった友達の中に〇とい
う人がいた。その時分からあまり
多くの朋友ほうゆうを持たなかった私には、
自然〇と往来ゆききを繁しげくするような傾
向があつた。私はたいてい一週に
一度くらいの割で彼を訪たずねた。あ
る年の暑中休暇などには、毎日欠
かさず真砂町まごいちように下宿している彼を
誘おおかわつて、大川の水泳場まで行つた。
〇は東北の人だから、口の利きき

方に私などと違った鈍^{どん}でゆったり
した調子があった。そうしてその
調子がいかにもよく彼の性質を代
表しているように思われた。何度
となく彼と議論をした記憶のある
私は、ついに彼の怒^{おこ}ったり激した
りする顔を見る事ができずにしまっ
た。私はそれだけでも充分彼を敬
愛^{あたい}に価^{ちやうじ}する長者として認めていた。

彼の性質が鷹揚^{おつやう}であるごとく、

彼の頭脳も私よりは遥かに大きかった。彼は常に当時の私には、考えの及ばないような問題を一人で考えていた。彼は最初から理科へ入る目的をもつていながら、好んで哲学の書物などを繙いた。私はある時彼からスペンサーの第一原理という本を借りた事をいまだに忘れずにいる。

空の澄み切った秋日和あきびよりなどには、

よく二人連れ立って、足の向く方
へ勝手な話をしながら歩いて行つ
た。そうした場合には、往来へ塀^{へい}
越^{ごし}に差し出た樹^きの枝から、黄色に
染ま^ちった小さい葉が、風もないの
に、はらはらと散る景色^{けしき}をよく見
た。それが偶然彼の眼に触れた時、
彼は「あッ悟^ちった」と低い声で叫
んだ事があった。ただ秋の色の空^{くう}
に動くのを美しくしいと観^{かん}ずるより

ほかに能のない私には、彼の言葉
が封じ込められた或秘密の符徴ふちようと
して怪しい響を耳に伝えるばかり
であつた。「悟りというものは妙
なものだな」と彼はその後あとから平
生のゆつたりした調子で独言ひとりごとのよ
うに説明した時も、私には一口の
挨拶あいさつもできなかつた。

彼は貧生であつた。大観音おおがんのんの傍そば
に間借じすいをして自炊じすいしていた頃には、

よく干鮭からぎけを焼いて佗わびしい食卓に私を着かせた。ある時は餅菓子もちがしの代わりに煮豆を買って来て、竹の皮のまま双方から突つつき合った。

大学を卒業すると間もなく彼は地方の中学に赴任した。私は彼のためにそれを残念に思った。しかし彼を知らない大学の先生には、それがむしろ当然と見えたかも知れない。彼自身は無論平気であつ

た。それから何年かの後^{のち}に、たしか三年の契約で、支那のある学校の教師に雇われて行つたが、任期が充^みちて帰るとすぐまた内地の中学校長になつた。それも秋田から横手に遷^{うつ}されて、今では樺太^{かばふと}の校長をしているのである。

去年上京したついでに久しぶりで私を訪^{たず}ねてくれた時、取次^{たず}のものかから名刺を受取つた私は、すぐ

その足で座敷へ行つて、いつもの
通り客より先に席に着いていた。

すると廊下伝ろうかづたいに室へやの入口まで来た

彼は、座蒲団ざぶとんの上にきちんと坐すわつ

ている私の姿を見るや否や、「い
やに澄すましているな」と云つた。

その時向むかひの言葉が終るか終らな
いうちに「うん」という返事がい
つか私の口を滑すべつて出てしまった。

どうして私の悪口わるくちを自分で肯定す

るようなこの挨拶あいさつが、それほど自
然に、それほど雑作ぞうさなく、それほ
ど拘泥こだわずに、するすると私の
咽喉のどを滑り越すべしたものだろうか。

私はその時透明な好い心持がした。

十

向い合って座を占めたOと私と
は、何より先に互の顔を見返して、

そこにまだ昔むかしのままの面影おもかげが、
懐なつかしい夢の記念のように残つて
いるのを認めた。しかしそれはあ
たかも古い心が新しい気分の中に
ぼんやり織り込まれていると同じ
事で、薄暗く一面に霞かすんでいた。
恐ろしい「時」の威力に抵抗して、
再びもとの姿に戻る事は、二人に
とつてもう不可能であつた。二人
は別れてから今会うまでの間に挟はさ

まっっている過去という不思議なものを顧みない訳に行かなかつた。

〇は昔し林檎りんごのように赤い頬と、人一倍大きな丸い眼と、それから女に適したほどふっくりした輪廓りんかくに包まれた顔をもっていた。今見てもやはり赤い頬と丸い眼と、同じく骨張らない輪廓の持主ではあるが、それが昔しとはどこか違っている。

私は彼に私の口髭くちひげと揉み上げもあを見せた。彼はまた私のために自分の頭を撫なでて見せた。私のは白く
なつて、彼のは薄く禿はげかかつて
いるのである。

「人間も樺太かばふとまで行けば、もう行く先はなかるうな」と私が調戯からかうと、彼は「まあそんなものだ」と答えて、私のまだ見た事のない樺太の話をして聞かせた。

しかし私は今それをみんな忘れてしまった。夏は大変好い所だという事を覚えていてだけである。

私は幾年ぶりかで、彼といっしょ

に表へ出た。彼はフロツクの上へ、とんびがいとうのような外套をぶわぶわに

着ていた。そうして電車の中で釣つり

革かわにぶら下りながら、隠袋かくしから手ハン

帛ケチに包んだものを出して私に見せ

た。私は「なんだ」と訊きいた。彼

は「栗饅頭くりまんじゅうだ」と答えた。栗饅頭

は先刻さっき彼が私の宅うちにいた時に出し

た菓子であつた。彼がいつの間に、

それを手帛に包んだらうかと考え

た時、私はちよつと驚かされた。

「あの栗饅頭を取つて来たのか」

「そうかも知れない」

彼は私の驚いた様子を馬鹿にす

るような調子でこう云つたなり、

その手帛ハンケチの包をまた隠袋かくしに収めて

しまった。

我々はその晩帝劇へ行つた。私の手に入れた二枚の切符に北側から入れという注意が書いてあつたのを、つい間違えて、南側へ廻るうとした時、彼は「そつちじやないよ」と私に注意した。私はちよつと立ち留まつて考えた上、「なるほど方角は樺太かばふとの方がたしか確なようだ」と云いながら、また指定された入

口の方へ引き返した。

彼は始めから帝劇を知っている
と云っていた。しかし晩餐を済ま
した後で、自分の席へ帰ろうとす
るとき、誰でもやる通り、二階と
一階の扉を間違えて、私から笑わ
れた。

折々隠袋から金縁の眼鏡を出し
て、手に持った摺物を読んで見る
彼は、その眼鏡を除さずに遠い舞

台を平気で眺めていた。

「それは老眼鏡じゃないか。よくそれで遠い所が見えるね」

「なにチャブドーだ」

私にはこのチャブドーという意味が全く解らなかった。彼はそれを大差なしという支那語だと云って説明してくれた。

その夜の帰りに電車の中で私と別れたぎり、彼はまた遠い寒い日

本の領地の北の端はずれに行つてしまつた。

私は彼を想おもい出すたびに、達人たつじんという彼の名を考える。するとその名がとくに彼のために天から与えられたような心持になる。そうしてその達人が雪と氷に鎖とざされた北の果はてに、まだ中学校長をして
いるのだなと思う。

ある奥さんがある女の人を私に
紹介した。

「何か書いたものを見ていただき
たいのだそうでございます」

私は奥さんのこの言葉から、頭
の中でいろいろの事を考えさせら
れた。今まで私いまの所へ自分の書い
たものを読んでくれと云って来た

ものは何人となくある。その中には原稿紙の厚さで、一寸または二寸ぐらいの嵩かさになる大部のものも交っていた。それを私は時間の都合の許す限りなるべく読んだ。そうして簡単な私はただ読みさえすれば自分の頼まれた義務を果はたしたものと心得て満足していた。ところが先方では後から新聞に出してくれと云つたり、雑誌へ載せて貰もら

いたいと頼んだりするのが常であった。中には他にひとに読ませるのは手段で、原稿を金に換えるのが本来の目的であるように思われるのも少なくはなかった。私は知らない人の書いた読みにくい原稿を好意的に読むのがだんだん厭いやになつて来た。

もつとも私の時間に教師をしていた頃から見ると、多少の弾力性

ができてきたには相違なかった。
それでも自分の仕事にかかれば腹
の中はずいぶん多忙であつた。親
切ずくで見てもやろうと約束した原
稿すら、なかなか埒らちのあかない場
合もないとは限らなかつた。

私は私の頭で考えた通りの事を
そのまま奥さんに話した。奥さん
はよく私のいう意味を領解して歸つ
て行つた。約束の女が私の座敷へ

来て、座蒲団ざぶとんの上に坐ったのはそれから間もなくであった。佗わびしい雨が今にも降り出しそうな暗い空を、硝子戸越ガラスどごしに眺めながら、私は女にこんな話をした。

「これは社交ではありません。御互ていさいに体裁の好い事ばかり云い合っていては、いつまで経たったって、啓発されるはずも、利益を受ける訳もないのです。あなたは思い切つ

て正直にならなければ駄目だめですよ。
自分さえ充分に開放して見せれば、
今あなたがどこに立ってどっちを
向いているかという实际が、私に
よく見えて来るのです。そうした
時、私は始めてあなたを指導する
資格を、あなたから与えられたも
のと自覚しても宜よろしいのです。だ
から私が何か云ったら、腹に答え
べき或物を持つている以上、けっ

して黙っ
ていては
いけません。
こ
んな事
を云つた
ら笑われ
はしま
い
か、恥
を搔かき
はしま
いか、
また
は
失礼だ
といっ
て怒ら
れはし
ま
い
か
など
と遠慮
して、
相手
に自
分
と
い
う
正
体
を
黒
く
塗
り
潰つぶ
した
所
ば
か
り
示
す
工
夫くふう
を
す
る
な
ら
ば、
私
が
い
く
ら
あ
な
た
に
利
益
を
与
え
よ
う
と
焦
慮あせつ
て
も、
私
の
射
る
矢
は
こ
と
ご
と
く
空あだ
矢や
に
な
っ
て
し
ま
う
だ
け
で
す。

「これは私のあなたに対する注文
ですが、その代り私の方でもこの
私というものを隠しは致しません。
ありのままを曝さらけ出だすよりほかに、
あなたを教える途みちはないのです。

だから私の考えのどこかに隙すきがあつ
て、その隙をもしあなたから見破
られたら、私はあなたに私の弱点
を握られたという意味で敗北の結
果おちいに陥るのです。教を受ける人だ

けが自分を開放する義務をもって
いると思うのは間違っています。

教える人も己おのれをあなたの前に打
ち明けるのです。双方とも社交を
離れて勘破かんぱし合うのです。

「そういう訳で私はこれからあな
たの書いたものを拝見する時に、
ずいぶん手ひどい事を思い切つて
云うかも知れませんが、しかし怒つ
てはいけません。あなたの感情を

害するためにはないので
すから。その代りあなたの方でも
腑ふに落ちない所があつたらどこま
でも切り込んでいらつしやい。あ
なたが私の主意を了解している以
上、私はけつして怒るはずはあり
ませんから。

「要するにこれはただ現状維持を
目的として、うわすべ上滑りな円滑を主位
に置く社交とは全く別物なのです。

解りましたか」

女は解ったと云って帰って行つた。

十二

私に短冊たんざくを書けの、詩を書けの
と云つて来る人がある。そうして
その短冊やらぬめ絛ぬめやらをまだ承諾も
しないうちに送つて来る。最初の

うちはせつかくの希望を無にする
のも気の毒だという考から、拙まずい
字とは思いながら、先方の云うな
りになつて書いていた。けれども
こうした好意は永続しにくいもの
と見えて、だんだん多くの人の依
頼を無にするような傾向が強くなつ
て来た。

私はすべての人間を、毎日毎日
恥かを搔くために生れてきたものだ

とさえ考える事もあるのだから、
変な字を他ひとに送ってやるくらいの
所作しよわざは、あえてしよつと思えば、
やれないとも限らないのである。
しかし自分が病気のとき、仕事の
忙いそがしい時、またはそんな真似まねの
したくない時に、そういう注文が
引き続いて起つてくると、実際弱
らせられる。彼らの多くは全く私
の知らない人で、そうして自分達

の送った短冊を再び送り返すこち
らの手数てすうさえ、まるで眼中に置い
ていないように見えるのだから。

そのうちで一番私を不愉快にし
たのは播州ばんしゅうの坂越さかいしにいる岩崎とい
う人であった。この人は数年前よ
く端書はがきで私に俳句を書いてくれと
頼んで来たから、その都度つど向うの
いう通り書いて送った記憶のある
男である。その後の事のちであるが、

彼はまた四角な薄い小包を私に送った。私はそれを開けるのさえ面倒だったから、ついそのままにして書斎へ放り出しておいたら、下女が掃除をする時、つい書物と書物の間へ挟み込んで、まず体よくしまい失くした姿にしてみました。

この小包と前後して、名古屋から茶の缶が私宛で届いた。しかし誰が何のために送ったものかその

意味は全く解らなかつた。私は遠慮なくその茶を飲んでしまった。

するとほどなく坂越の男から、富士登山の画えを返してくれと云つてきた。彼からそんなものを貰つた覚おぼえのない私は、打ちうやつておいた。

しかし彼は富士登山の画を返せ返せと三度も四度も催促してやまない。私はついにこの男の精神状態を疑い出した。「おおかた大方気違だろ

う。「私は心の中でこうきめたな
り向うの催促にはいっさい取り合
わない事にした。

それから二三カ月経^たつた。たし

か夏の初の頃と記憶しているが、
私はあまり乱雑に取り散らされた
書齋の中に坐^{すわ}っているのがうっ
うしくなつたので、一人でぽつぽ
つそこいらを片づけ始めた。その
時書物の整理をするため、好い加

減に積み重ねてある字引や参考書を、一冊ずつ改めて行くと、思いがけなく坂越の男が寄こした例の小包が出て来た。私は今まで忘れていたものを、眼まのあたり見て驚ろいた。さっそく封を解といて中をしら検べたら、小さく畳んだ画が一枚入っていた。それが富士登山の図だったので、私はまた吃驚びっくりした。

包のなかにはこの画のほかの手

紙が一通添えてあつて、それに画の賛をしてくれという依頼と、御礼に茶を送るといふ文句が書いてあつた。私はいよいよ驚ろいた。

しかしその時の私はとうてい富士登山の凶などに賛をする勇気をもつていなかつた。私の気分が、そんな事とは遥^{はる}か懸^かけ離れた所にあつたので、その画に調和するよ
うな俳句を考えている暇がなかつ

たのである。けれども私は恐縮した。私は丁寧ていねいな手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御礼を云った。最後に富士登山の図を小包にして返した。

十三

私はこれで一段落いちだんらくついたものと思つて、例の坂越さかこしの男の事を、そ

れぎり念頭に置かなかつた。する
とその男がまた短冊を封じて寄こ
した。そうして今度は義士に関係
のある句を書いてくれといつので
ある。私はそのうち書こうと云つ
てやつた。しかしなかなか書く機
会が来なかつたので、ついそのま
まになつてしまった。けれども執しつ
濃こいこの男の方ではけつしてその
ままに済ます気はなかつたものと

見えて、むやみに催促を始め出した。その催促は一週に一遍か、二週に一遍の割できつと来た。それが必ず端書はがきに限っていて、その書き出しには、必ず「拝啓失敬申し候えども」とあるにきまっていた。私はその人の端書を見るのがだんだん不愉快になって来た。

同時に向うの催促も、今まで私の予期していなかった変な特色を

帯びるようになってきた。最初には茶をやったではないかという言葉が見えた。私がそれに取り合わずに見えた。今度はあの茶を返してくいると、今度はあの茶を返してくれという文句に改たまった。私は返す事はたやすいが、その手数料てかずが面倒だから、東京まで取りに来れば返してやると云ってやりたくなつた。けれども坂越の男にそういう手紙を出すのは、自分の品格にかか関

わるような気がしてあえてし切れ
なかつた。返事を受け取らない先
方はなおの事催促をした。茶を返
さないならそれでも好いから、金
一円をその代価として送って寄こ
せといつのである。私の感情はこ
の男に対してしだいに荒すさんで来た。
しまいにはとうとう自分を忘れる
ようになつた。茶は飲んでしまつ
た、短冊は失なくしてしまつた、以

来端書を寄こす事はいつさい無用
であると書いてやった。そうして
心のうちで、非常に苦々しい気分
を経験した。こんな非紳士的な挨あい
拶さつをしなければならぬような穴
の中へ、私を追い込んだのは、こ
の坂越の男であると思つたからで
ある。こんな男のために、品格に
もせよ人格にもせよ、幾分の墮落
を忍ばなければならぬのかと考

えると情なさけなかつたからである。

しかし坂越の男は平気であつた。

茶は飲んでしまい、短冊は失なくし

てしまうとは、余りと申せば……

とまた端書に書いて来た。そうし

てその冒頭には依然として拝啓失

敬申し候そうじえどもという文句が規則

通り繰り返されていた。

その時私はもうこの男には取り

合あうまいと決心した。けれども私

の決心は彼の態度に対して何の効果のあるはずはなかった。彼は相変わらず催促をやめなかった。そうして今度は、もう一度書いてくれれば、また茶を送ってやるがどうかと云って来た。それから事いやしくも義士に関するのだから、句を作っても好いだらうと云って来た。

しばらく端書が中絶したと思う

と、今度はそれが封書に変わった。
もっともその封筒は区役所などで
使う極きわめて安い鼠色ねずみいろのものであつ
たが、彼はわざとそれに切手を貼は
らないのである。その代り裏に自
分の姓名も書かずに投函とうかんしていた。
私はそれがために、倍の郵税を二
度ほど払わせられた。最後に私は
配達夫に彼の氏名と住所とを教え
て、封のまま先方へ逆送して貰つ

た。彼はそれで六錢取られたせい
か、ようやく催促を断念したらし
い態度になった。

ところが二カ月ばかり経つて、
年が改まると共に、彼は私に普通
の年始状を寄こした。それが私を
ちよつと感心させたので、私はつ
い短冊へ句を書いて送る気になっ
た。しかしその贈物は彼を満足さ
せるに足りなかつた。彼は短冊が

折れたとか、汚よごれたとか云って、
しきりに書き直しを請求してやま
ない。現に今年の正月にも、「失
敬申し候えども……」という依頼
状が七八日頃ななよつかに届いた。
私がこんな人に出会ったのは生
れて始めてである。

十四

ついこの間昔むかし私うちの家へ泥棒の
入った時の話を比較的くわ的詳しく聞い
た。

姉がまだ二人とも嫁かたづかずにい
た時分の事だというから、年代に
すると、多分私の生れる前後に当
るのだらう、何しろ勤王とか佐幕
とかいう荒々しい言葉の流行はやった
やかましい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中よなかに小こよ

用に起きた後、手を洗うために、
潜戸を開けると、狭い中庭の隅に、
壁を押しつけるような勢で立って
いる梅の古木の根方が、かつと明
るく見えた。姉は思慮をめぐらす
暇もないうちに、すぐ潜戸を締め
てしまったが、締めたあとで、今
目前に見た不思議な明るさをそこ
に立ちながら考えたのである。

私の幼心に映ったこの姉の顔は、

いまだに思い起そうとすれば、いつでも眼の前に浮ぶくらい鮮めいせいかである。しかしその幻像はすでに嫁に行つて齒を染めたあとの姿であるから、その時縁側えんがわに立つて考えていた娘盛りの彼女を、今胸のうちを描き出す事はちよつと困難である。

広い額、浅黒い皮膚、小さいけれども明確はつきりした輪廓りんかくを具えている

鼻、ひとなみ人並より大きいふたえまぶち二重瞼の眼、

それから御沢おさわという優しい名、

私はただこれらをそうじゆう総合して、そ

の場合における姉の姿を想像する

だけである。

しばらく立っただまま考えていた

彼女の頭に、この時もしかすると

火事じゃないかという懸念けねんが起つ

た。それで彼女は思い切つてまた

切戸きりどを開けて外を覗のぞこうとする途とた

端^んに、一本の光る拔身^{ぬきみ}が、闇^{やみ}の中
から、四角に切った潜戸の中へす
うと出た。姉は驚いて身を後^{あと}へ退^ひ
いた。その隙^{ひま}に、覆面をした、龕^{がんど}
灯提灯^{うちょうちん}を提^さげた男が、抜刀のまま、
小^ちさい潜戸から大勢家^{うち}の中へ入っ
て来たのだそうである。泥棒^{にん}の人
数^ずはたしか八人とか聞いた。
彼^ひらは、他^{ひと}を殺^{あや}めるために来た
のではないから、おとなしくして

いてくれさえすれば、家のものに
危害は加えない、その代り軍用金
を借せと云つて、父に迫つた。父
はないと断つた。しかし泥棒はな
かなか承知しなかつた。今角かどの小こく
倉屋らやという酒屋へ入つて、そこで
教えられて来たのだから、隠して
も駄目だと云つて動かなかつた。
父は不精無性ふしよつぶしよじに、とうとう何枚か
の小判を彼らの前に並べた。彼ら

は金額があまり少な過ぎると思っ
たものか、それでもなかなか帰る
うとしないので、今まで床の中に
寝ていた母が、「あなたの紙入に
入っているのもやっておしまいな
さい」と忠告した。その紙入の中
には五十両ばかりあったとかいう
話である。泥棒が出て行ったあと
で、「余計な事をいう女だ」と云っ
て、父は母を叱りつけたそうであ

る。

その事があつて以来、私の家では柱を切り組きくみにして、その中へあり金を隠す方法を講じたが、隠すほどの財産もできず、また黒装束くろそうぞくを着けた泥棒も、それぎり来ないので、私の生長する時分には、どれが切組きりくみにしてある柱かまるで分からなくなっていた。

泥棒が出て行く時、「この家はうち

大變締りしまの好い宅うちだ」と云つて賞ほ
めたそうだが、その締りの好い家
を泥棒に教えた小倉屋の半兵衛さ
んの頭には、あくる日から擦り傷かすきず
がいくつとなくできた。これは金
はありませんと断わるたびに、泥
棒がそんなはずがあるものかと云つ
ては、抜身の先でちよいちよい半
兵衛さんの頭を突ツついたからだ
という。それでも半兵衛さんは、

「ぐいぐいしても宅うちにはありません、
裏の夏目さんにはたくさんあるか
ら、あすこへいらっしやい」と強
情を張り通して、とうとう金は一
文も奪とられずにしまった。

私はこの話を妻さいから聞いた。妻
はまたそれを私の兄ちやうけから茶受話ばなしに
聞いたのである。

私が去年の十一月学習院で講演をしたら、薄謝と書いた紙包を後から届けてくれた。立派な水引みずひきがかかっているので、それを除はずして中を改めると、五円札が二枚入っていた。私はその金を平生から気の毒に思っていた、或懇意な芸術家に贈ろうかしらと思って、暗あんに彼の来るのを待ち受けていた。ところがその芸術家がまだ見えない

先に、何か寄附の必要ができてきたりして、つい二枚とも消費してしまっただ。

一口でいこう、この金は私にとってけっして無用なものではなかったのである。世間の通り相場で、立派に私のために消費されたというよりほかに仕方がないのである。けれどもそれを他にひとにやろうとまで思った私の主観から見れば、そんな

なによりがたみの附着していない
金には相違なかつたのである。打
ち明けた私の心持をいうと、こう
した御礼を受けるより受けない時
の方がよほど颯爽さつぱうしていた。

くろやなぎかいしゅう 畔柳芥舟君がちよぎゅうかい 樗牛会の講演の事

で見えた時、私は話のついでとし
て一通りその理由を述べた。

「この場合私は労力を売りに行つ
たのではない。好意づくで依頼に

応じたのだから、向うでも好意だけで私に酬むくいたらよかるうと思う。もし報酬問題とする気なら、最初から御礼はいくらするが、来てくれるかどうかと相談すべきはずでしょう」

その時K君は納得なつとくできないといったような顔をした。そうして二回答えた。

「しかしどいひでしよ。び。その十円

はあなたの労力を買ったという意味でなくって、あなたに対する感謝の意を表する一つ的手段と見たら。そう見る訳には行かないのですか」

「品物なら判然はつきりそう解釈もできるのですが、不幸にも御礼が普通営業的の売買ばいばいに使用する金なので、から、どっちとも取れるのです」「どっちとも取れるなら、この際さい

善意の方に解釈した方が好くはない
いでしょつか」

私はもっともだとも思った。し
かしまたこう答えた。

「私は御存じの通り原稿料で衣食
しているくらいですから、無論富
裕とは云えませんが。しかしどうか
こうか、それだけで今日こんにちを過すごし
て行かれるのです。だから自分の
職業以外の事にかけては、なるべ

く好意的に人のために働いてやりたいという考えを持っています。

そうしてその好意が先方に通じるのが、私にとっては、何よりも尊たっとい報酬なのです。したがって金などを受けると、私が人のために働いてやるという余地、今の私にはこの余地がまた極めて狭いのです。その貴重な余地を腐ふし蝕くさせられたような心持になりま

す

K君はまだ私の云う事を肯うけがわない様子であつた。私も強情であつた。

「もし岩崎とか三井とかいう大富豪に講演を頼むとした場合に、後から十円の御礼を持って行くでしようか、あるいは失礼だからと云つて、ただ挨拶あいさつだけにとどめておくでしようか。私の考ではおそろく

金銭は持つて行くまいと思つので
すが」

「さあ」といつただけでK君は判
然した返事を与えなかつた。私に
はまだ云う事が少し残つていた。

「己惚おのぼれかは知りませんが、私の頭
は三井岩崎に比くらべるほど富んでい
ないにしても、一般学生よりはずつ

と金持に違いないと信じています」
「そうですね」とK君は首肯うなずい

た。

「もし岩崎や三井に十円の御礼を
持つて行く事が失礼ならば、私の
所へ十円の御礼を持つて来るのも
失礼でしょう。それもその十円が
物質上私の生活に非常な潤沢じゅうおいを与
えるなら、またほかの意味からこ
の問題を眺める事もできるでしょ
うが、現に私はそれを他ひとにやろう
とまで思ったのだから。私の

現下の経済的生活は、この十円のために、ほとんど目につほどの影響を蒙らないのだから」

「よく考えて見ましよう」といつたK君はにやにや笑いながら帰って行った。

十六

宅の前のだらだら坂を下りるよ、

一間ばかりの小川に渡した橋があつて、その橋向うのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたつた一度そこで髪を刈^かつて貰つた事がある。

平生は白い金巾^{かなきん}の幕で、硝子戸^{ガラスど}の奥が、往来から見えないようにしてあるので、私はその床屋の土間に立って、鏡の前に座を占めるまで、亭主の顔をまるで知らずに

いた。

亭主は私の入ってくるのを見る
と、手に持った新聞紙を放り出し
てすぐ挨拶をした。その時私はど
うもどこかで会った事のある男に
違ないという気がしてならなかつ
た。それで彼が私の後へ廻って、
鉄をちよきちよき鳴らし出した頃
を見計らって、こっちから話を持
ちかけて見た。すると私の推察通

り、彼は昔むかし寺町の郵便局の傍そばに
店を持つて、今と同じように、散
髪を渡世とせいとしていた事が解つた。

「高田の旦那だんななどにもだいぶ御世
話になりました」

その高田というのは私の従兄いとこな
のだから、私も驚いた。

「へえ高田を知ってるのかい」

「知ってるぞいころじゃいませ
ん。始終しじゆ徳とく、徳とく、つて鼻ひら眞まにして

下すつたもんです」

彼の言葉遣づかいはこういう職人に
してはむしろ丁寧ていねいな方であつた。

「高田も死んだよ」と私がいうと、
彼は吃驚びっくりした調子で「へッ」と声
を揚あげた。

「いい旦那でしたがね、惜しい事
に。いつ頃ごろ御亡おなくなりになりまし
た」

「なに、つい此間こないださ。今日で二週

間になるか、ならないぐらいのも
のだろう」

彼はそれからこの死んだ従兄いとこに
ついて、いろいろ覚えていてる事を
私に語った末、「考えると早いも
んですね旦那、つい昨日きのうの事としっ
きや思われぬのに、もう三十年
近くにもなるんですから」と云っ
た。

「あのそら求友亭きゆうゆうていの横町にいらしっ

てね、……」と亭主はまた言葉を
継ぎ足した。

「うん、あの二階のある家うちだろう」

「ええ御二階がありましたっけ。

あすこへ御移りになつた時なんか、
方々様ほうぼうさまから御祝い物なんかあつて、

大変御盛いじやかんでしたがね。それから後あと

でしたっけか、行願寺ぎょうがんじの寺内じないへ御
引越なすつたのは」

この質問は私にも答えられなかつ

た。実はあまり古い事なので、私もつい忘れてしまったのである。

「あの寺内も今じゃ大変変ったよ
うだね。用がないので、それから
つい入って見た事もないが」

「変ったの変わらないのってあなた、
今じゃまるで待合ばかりでさあ」

私は肴町さかなまちを通るたびに、その寺
内へ入る足袋屋たびやの角の細い小路こうじの
入口に、ごたごた掲かかげられた四角

な軒灯の多いのを知っていた。しかしその数を勘定かんじょうして見るほどの道楽気も起らなかったもので、ついで亭主のいう事には気がつかずにいた。

「なるほどそう云えば誰たが袖そでなんて看板が通りから見えるようだね」
「ええたくさんできましたよ。もつとも変わるはずですね、考えて見ると。もうちがて三十年にもなるつ

と云うんですから。旦那も御承知の通り、あの時分は芸者屋つたら、寺内にたつた一軒しきや無かつたもんでさあ。東家あずまぢやつてね。ちようどそら高田の旦那まんせうじの真向まへむかひでしたるう、東家の御神灯ごじんとうのぶら下がつていたのは「

十七

私はその東家をよく覚えていた。
従兄いとこの宅うちのついで向むかいなので、両方の
ものが出入ではいりのたびに、顔を合わ
せさえすれば挨拶あいさつをし合うぐらい
の間柄あいだがらであつたから。

その頃従兄の家には、私の二番
目の兄がごろごろしていた。この
兄は大の放蕩ほうとうもので、よく宅の懸かけ
物ものや刀剣類を盗み出しては、それ
を二束三文に売り飛ばすという悪

い癖くせがあつた。彼が何で従兄の家に転ころがり込んでいたのか、その時の私には解らなかつたけれども、今考えると、あるいはそうした乱暴を働うちらいた結果、しばらく家を追い出されていたかも知れないと思う。その兄のほかに、まだ庄さんという、これも私の母方の従兄に当る男が、そこいらにぶらぶらしていた。

「じつじつ連中がいつでも一つ所に落ち合つては、寝そべつたり、縁側へ腰をかけた^{えんがわ}りして、勝手な出放題を並べていると、時々向うの芸者屋の竹格子の窓から、^{たけごうし}「今^{こん}日は^ち」などと声をかけられたりする。それをまた待ち受けてでもいるじつじつに、連中は「おいちよつとおいで、好いものあるから」とか何とか云つて、女を呼び寄せよ

うとする。芸者の方でも昼間は暇だから、三度に一度は御愛嬌ごあいぎょうに遊あそびに来る。といった風の調子であった。

私はその頃まだ十七八だつたるう、その上大変な羞恥屋はにかみやで通つていたので、そんな所に居合あわしても、何にも云わずに黙すつて隅すみの方に引込ひっこんでばかりいた。それでも私は何かの拍子ひょうしで、これらの人々

といっしょに、その芸者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢おごらなければならぬので、私は人の買つた寿司すしや菓子をだいぶ食つた。

一週間ほど経たつてから、私はまたこののらくらの兄に連れられて同じ宅へ遊びに行つたら、例の庄さんも席に居合あわせて話がだいぶはずんだ。その時咲松さきまつという若い

芸者が私の顔を見て、「またトランプをしまししょう」と云った。私は小倉の袴こくら はかまを穿はいて四角張よしかたつていたが、懐中には一銭の小遣こづかいさえ無かった。

「僕は銭ぜにがないから厭いやだ」

「好いわ、私わたしが持つてるから」

この女はその時眼を病んででもいたのだろう、こづいいいい、綺きれ

麗いな襦袢じゆばんの袖そででしきりに薄赤くなっ

た一二重瞼ふたえまぶちを擦こすっていた。

その後私は「御作おさくが好い御客ごきゃくに引かされた」という噂うわさを、従兄いとこの家うちで聞いた。従兄の家では、この女の事を咲松さきまつと云わないで、常に御作御作と呼んでいたのである。

私はその話を聞いた時、心の内でもう御作に会う機会も来こないだろうと考えた。

ところがそれからだいぶ経って、

私が例の達人たつじんといっしょに、芝の
山内さんないの勸工場かんこうばへ行ったら、そこで
またぱったり御作に出会った。こ
ちらの書生姿に引き易ひかえて、彼女
はもう品の好ひんい奥様おくさまに変わっていた。
旦那だんなというのも彼女の傍そばについて
いた。……

私は床屋の亭主の口から出た東あず
家まやという芸者屋の名前の奥ひそに潜ひそん
でいるこれだけの古い事実を急に

思い出したのである。

「あすこにいた御作という女を知ってるかね」と私は亭主に聞いた。

「知ってるどころか、ありや私の姪めいでさあ」

「そうかい」

私は驚ろいた。

「それで、今どこにいるのかね」

「御作は亡なくなりましたよ、旦那」
私はまた驚ろいた。

「いっ」

「いっつって、もう昔の事になりますよ。たしかあれが二十三の年でしたらう」

「へええ」

「しかも浦塩ウラジオで亡くなっただんです。

旦那が領事館に關係のある人だつたもんですから、あつちへいっしょに行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は帰って硝子戸ガラスどの中に坐つて、
まだ死なずにいるものは、自分と
あの床屋の亭主だけのような気が
した。

十八

私の座敷へ通されたある若い女
が、「どうも自分の周囲まわりがきちん
と片づかないで困りますが、どう

したら宜よろしいものでしょ？」と聞
いた。

この女はある親戚の宅うちに寄寓きぐうし
ているので、そこが手狭てせまな上に、
子供などが蒼蠅蒼蠅いのだらうと思っ
た私の答は、すこぶる簡単であつ
た。

「どこかさっぱりした家うちを探して
下宿でもしたら好いでしょ」「う
いえ部屋の事ではないので、頭

の中がきちんと片づかないで困る
のです」

私は私の誤解を意識すると同時に、女の意味がまた解らなくなつた。それでももう少し進んだ説明を彼女に求めた。

「外からは何でも頭の中に入って来ますが、それが心の中心と折合がつかないのです」

「あなたのいう心の中心とはいっ

たいどんなものですか」

「どんなものと云って、まっすぐ真直な直

線なのです」

私はこの女の数学に熱心な事を
知っていた。けれども心の中心が
直線だという意味は無論私に通じ
なかつた。その上中心とははたし
て何を意味するのか、それもほと
んど不可解であつた。女はこう云つ
た。

「物には何でも中心がぐざいまじよ
「う」

「それは眼で見る事ができ、
尺度ものさし
で計る事のできる物体についての
話でしょう。心にも形があるんで
すか。そんならその中心というも
のをここへ出して御覧なさい」

女は出せるとも出せないとも云
わずに、庭の方を見たり、
膝ひざの上
で両手を擦すつたりしていた。

「あなたの直線というのは比喩たとえじゃありませんか。もし比喩なら、円まると云つても四角と云つても、つまり同じ事になるのでしょ」

「そうかも知れませんが、形や色が始終しじゅう変っているうちに、少しも変らないものが、どいつしてもあるのです」

「その変るものと変らないものが、別々だとすると、要するに心が二

つある訳になります。それが好いのですか。変わるものはすなわち変らないものでなければならぬはずじゃありませんか」

こう云った私はまた問題を元に返して女に向った。

「すべて外界のものが頭のなかに入つて、すぐ整然と秩序なり段落なりがはつきりするようにならぬ人は、おそろくないでしょう。失

礼ながらあなたの年齢としや教育や学問で、そうきちんちんと片づけられる訳がありません。もしまたそんな意味でなくって、学問の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりをつけたいなら、私のようなもの所へ来ても駄目だめです。坊さんの所へでもいらっしやい」

すると女が私の顔を見た。

「私は始めて先生を御見上げ申し

た時に、先生の心はそういひ無で、
普通の人以上に整ととののつていらつしや
るように思いました」

「そんなはずがありません」

「でも私にはそう見えませんでした。内
臓うつのの位置までが調つていらつしや
るとしか考えられませんでした」

「もし内臓がそれほど具合よく調
節しじゆうされているなら、こんなに始終
病気などはしません」

「私は病気にはなりません」とその時女は突然自分の事を云った。

「それはあなたが私より偉い証拠しょうこです」と私も答えた。

女は蒲団ふとんを滑り下りた。そうして、「どうぞ御身体おからだを御大切にごたいせつ」と云って帰って行った。

十九

私の旧宅は今私の住んでいる所から、四五町奥の馬場下という町にあつた。町とは云い条、その実じつ小さな宿場としか思われないくらい、小供の時の私には、寂れ切さびきつてかつ淋さむしく見えた。もともと馬場下とは高田の馬場の下にあるという意味なのだから、江戸絵図で見ても、朱引内しゅびきうちか朱引外しゅびきそとが分らない辺鄙へんぴな隅すみの方にあつたに違ない

のである。

それでも内蔵造くらづくりの家が狭い町内うちに三四軒はあつたろう。坂を上あがると、右側に見える近江屋伝兵衛おうみやでんべえという薬種屋やくしゅやなどはその一つであつた。それから坂を下り切おきつた所に、間口の広い小倉屋こくらやという酒屋もあつた。もつともこの方は倉造りではなかつたけれども、堀部安兵衛ほりべやすべえが高田の馬場で敵かたきを打つ時に、ここ

へ立ち寄って、ますざけ 枅酒を飲んで行つたという履歴のある家柄いえがらであつた。私はその話を小供の時分から覚えていたが、ついぞそこにしまつてあるという噂うわさの安兵衛が口を着けた枅を見たことがなかつた。その代り娘の御北おきたさんの長唄ながうたは何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だかまるで解らなかつたけれども、私の宅うちの玄関から表へ

出る敷石の上に立って、通りへで
も行くつとすると、御北さんの声
がそこからよく聞こえたのである。
春の日の午過ひるすけなどに、私はよく恍うつ
惚とりとした魂を、麗うつくかな光に包みな
がら、御北さんの御浚おしらいを聴くで
もなく聴かぬでもなく、ぼんやり
私の家の土蔵の白壁に身を靠もたせ
て、佇立たたずんでいた事がある。その
御蔭おかげで私はとうとう「旅の衣ころもは篠すず

懸^{かけ}の「などという文句をいつの間にか覚えてしまった。」

このほかには棒屋が一軒あつた。

それから鍛冶^{かじや}屋も一軒あつた。少

し八幡坂^{はちまんざか}の方へ寄つた所には、広

い土間を屋根の下に囲い込んだやつ。

ちや場^ばもあつた。私の家のものは、

そこの主人を、問屋^{とんや}の仙太郎さん

と呼んでいた。仙太郎さんは何で

も私の父とごく遠い親類つづきに

なっているんだとか聞いたが、交つき際あいからいうと、まるで疎濶そかつであつた。往来で行き会う時だけ、「好い御天気で」などと声をかけるくらいの間柄あいだがらに過ぎなかつたらしく思われる。この仙太郎さんの一人娘が講釈師の貞水ていすいと好い仲になつて、死ぬの生きるのという騒ぎのあつた事も人聞ひときかれに聞いて覚えてはいるが、纏まとまつた記憶は今頭のとど

こにも残っていない。小供の私には、それよりか仙太郎さんが高い台の上に腰をかけて、やたて矢立と帳面を持つたまま、「いやっちやいくら」と威勢の好い声で下にいる大勢の顔を見渡す光景の方がよっぽど面白かった。下からはまた二十本も三十本もの手を一度に挙げあて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ろんじだのがれんだのと

いう特徴ふちようを、罵のしるように呼び上
げるうちに、薑しょうがや茄子なすや唐茄子とうの
籠かごが、それらの節太ふしぶとの手で、どし
どしどこかへ運び去られるのを見
ているのも勇ましかつた。

どんな田舎いなかへ行つてもありがち
な豆腐屋とうふやは無論あつた。その豆腐
屋には油にの臭においの染み込こんだ縄暖簾なわのれん
がかかつていて門口かどぐちを流れる下水
の水が京都へでも行つたように綺きれ

麗いだった。その豆腐屋とうふやについて曲
ると半町ほど先に西閑寺せいかんじという寺
の門が小高く見えた。赤く塗られ
た門うしろの後は、深い竹藪たけやぶで一面に掩おお
われているので、中にどんなもの
があるか通りからは全く見えなかつ
たが、その奥でする朝晩の御勤おつとめの
鉦かねの音ねは、今でも私の耳に残つて
いる。ことに霧きりの多い秋から木枯こがらし
の吹く冬へかけて、カンカンと鳴

る西閑寺の鉦の音は、いつでも私
の心に悲しくて冷たい或物を叩き
込むように小さい私の気分を寒く
した。

二十

この豆腐屋の隣に寄席が一軒あつ
たのを、私は夢幻のようにまだ覚
えている。こんな場末に人寄場の

あろうはずがないというのが、私の記憶に霞かすみをかけるせいだろう、私はそれを思い出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議そうな眼を見張って、遠い私の過去をふり返るのが常である。

その席亭あるじの主人あるじというのは、町内の鳶頭とびがしらで、時々目暗縞めくらじまの腹掛はらかけに赤い筋すじの入った印袷しるしばんてんを着て、突っかけ草履ぞうりか何かでよく表を歩いて

いた。そこにまた御藤おふじさんという
娘があつて、その人の容色きりようしがよく
家うちのものの口のに上のつた事も、まだ
私の記憶を離れずにいる。後のには
養子を貰はつたが、それが口髭くちひげを生は
やした立派な男だつたので、私は
ちよつと驚ろかされた。御藤さん
の方でも自慢の養子だという評判
が高かつたが、後から聞いて見る
と、この人はどこかの区役所の書

記だとかいう話であった。

この養子が来る時分には、もう寄席もやめて、しもうた屋になつていたようであるが、私はその宅の軒先にまだ薄暗い看板が淋しそうに懸つていた頃、よく母から小遣を貰つてそこへ講釈を聞きに出かけたものである。講釈師の名前はたしか、南麟とかいった。不思議な事に、この寄席へは南麟よ

りほかに誰も出なかつたようである。この男の家はどこにあつたか知らないが、どの見当から歩いて来るにしても、道普請ができて、家並の揃つた今から見れば大事業に相違なかつた。その上客の頭数はいつでも十五か二十くらいなのだから、どんなに想像を逞ましくしても、夢としか考えられないのである。「もうしもうし花魁え、

と云われてハツ橋やはしなんざますえと
ふり返る、途端とたんに切り込む刃やいばの光」
という変な文句は、私がその時分
南麟おすから教わったのか、それとも
後あとになつて落語家はなしかのやる講釈師の
真似まねから覚えたのか、今では混雑
してよく分らない。

当時私の家からまず町らしい町
へ出ようとするには、どついつても
人気のない茶畠ちやばたけとか、竹藪たけやぶとかま

たは長い田圃路たんぼみちとかを通り抜けなければならなかった。買物らしい買物はたいてい神楽坂かぐらざかまで出る例になつていたので、そうした必要に馴ならされた私に、さした苦痛のあるはずもなかったが、それでも矢来やらいの坂を上あつて酒井様の火ひの見みや櫓ぐらを通り越して寺町へ出ようといふ、あの五六町の一筋道などになると、昼でも陰森いんしんとして、大空が

曇ったように始終薄暗しじゆうかった。

あの土手の上に二抱も三抱えもふたかかえ みかか

あろうという大木が、何本となく

並んで、その隙間すきま隙間をまた大き

な竹藪で塞ふさいでいたのだから、日

の目を拝む時間と云つたら、一日

のうちにおそらくただの一刻もな

かったのだらう。下町へ行こうと

思って、日和下駄ひよりげたなどを穿はいて出

ようものなら、きつと非道ひどい目に

あつにきまっていた。あすこの霜しも融どけは雨よりも雪よりも恐ろしいもののように私の頭に染しみ込こんでいる。

そのくらい不便な所でも火事の虞おそれはあつたものと見えて、やっぱり町の曲り角に高い梯子はしごが立っていた。そうしてその上に古い半鐘も型のごとく釣るしてあった。私はこうしたありのままの昔をよく

思い出す。その半鐘のすぐ下にあつた小さな一膳飯屋いちぜんめしやもおのずと眼先に浮かんで来る。縄暖簾なわのれんの隙間からあたたかそうな煮メにしめの香においが煙けむりと共に往来へ流れ出して、それが夕暮もやの霽とに融け込んで行く趣おもむきなども忘れる事ができない。私が子規のまだ生きているうちに、「半鐘と並んで高き冬木哉かな」という句を作ったのは、実はこの半鐘の記念のため

めであつた。

二十一

私の家に関する私の記憶は、惣そうじてこつこつという風に鄙ひなびている。そしてどこかに薄ら寒い憐あわれな影を宿している。だから今生き残っている兄から、つい此間こないだ、うちの姉達が芝居に行つた当時の様子を

聞いた時には驚ろいたのである。

そんな派は出でな暮しをした昔もあつ

たのかと思うと、私はいよいよ夢

のような心持になるよりほかはない。
い。

その頃の芝居小屋はみんな猿さる若わかち

町ちやうにあつた。電車も俾くるまもない時分

に、高田の馬場の下から浅草の観

音様の先まで朝早く行き着こうと

云うのだから、たいていの事では

なかつたらしい。姉達はみんな夜よな半かに起きて支度したくをした。途中が物ぶつ騒そうだといっているので、用心のため、下男ともがきつと供ともをして行つたそうである。

彼らは筑土つくどを下りて、柿の木横町あげばから揚場へ出て、かねてその船宿にあつらえておいた屋根船に乗るのである。私は彼らがいかに予期みに充ちた心をもつて、のろの

る砲兵工廠ほづへいこうじょうの前から御茶の水を通り越して柳橋まで漕こがれつつ行つただろうと想像する。しかも彼らの道中はけっしてそこで終りを告げる訳に行かないのだから、時間に制限をおかなかつたその昔がなおさら回顧の種になる。

大川へ出た船は、流を溯さかのぼつて吾あず妻橋まばしを通り抜けて、今戸いまどの有明楼ゆうめいろうの傍そばに着けたものだという。姉達

はそこから上^{あが}つて芝居茶屋まで歩いて、それからようやく設けの席につくべく、小屋へ送られて行く。設けの席というのは必ず高土間^{たかどま}に限られていた。これは彼らの服装^{なり}なり顔なり、髪飾なりが、一般の眼によく着く便利のいい場所なので、派出を好む人達が、争って手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に随^ついている男

が、どうぞぞ楽屋へお遊びにいらっ
しやいましたと云って案内に来る。

すると姉達はこの縮緬ちりめんの模様のお
る着物の上に袴はかまを穿はいた男おとこのあとに
跟ついて、田之助たのすけとか訥升とつしょうとかいう
鼻肩ひいきの役者の部屋へ行つて、扇子せんす
に画えなどを描かいて貰かつて帰かつてく
る。これが彼らの見栄みえだつたのだ
ろう。そうしてその見栄は金の力
でなければ買えなかつたのである。

帰りには元来もとた路を同じ舟で揚

場まで漕ぎ戻す。無要心ぶようじんだからと

云つて、下男がまた提灯ちようちんを点つけて

迎むかえに行く。宅うちへ着くのは今の時計

で十二時くらいにはなるのだらう。

だから夜半よなかから夜半までかかつて

彼らはようやく芝居を見る事がで

きたのである。……

こんな華麗はなやかな話を聞くと、私は

はたしてそれが自分の宅に起つた

事が知らんと疑いたくなる。どこか下町の富裕な町家の昔を語られたような気もする。

もつとも私の家も侍分さむらいぶんではなかつ

た。派出はでな付合つきあいをしなければなら

ない名主なぬしという町人であつた。私

の知っている父は、禿頭はげあたまの爺じいさん

であつたが、若い時分には、一中いちちゅう

節ぶしを習なつたり、馴染なじみの女ちりめんに縮緬ちりめんの

積夜具つみやぐをしてやつたりしたのだそ

うである。青山に田地でんちがあつて、
そこから上つて来る米だけでも、
家のものが食うちうには不足がなかつ
たとか聞いた。現に今生き残つて
いる三番目の兄などは、その米を
舂つく音を始終しじゆう聞いたと云っている。
私の記憶によると、町内のものが
みんなして私の家を呼んで、玄関げんか
玄関と称となえていた。その時分の私
には、どづいという意味が解らなかつ

たが、今考えると、式台のついた
厳いかめしい玄関付の家は、町内にたつ
た一軒しかなかつたからだろうと
思う。その式台上つた所に、突つく
棒ぼうや、袖そで搦がらみや刺さつ股またや、また古こぼけ
た馬ば上じょう提灯などが、並んで懸かけて
あつた昔なら、私でもまだ覚えて
いる。

この二三年來私はたいてい年に
一度くらいの割で病氣をする。そ
うして床とこについてから床を上げる
までに、ひとつきほぼ一月のひかず日数をつぶ潰して
しまう。

私の病氣と云えば、いつもきまっ
た胃の故障なので、いざとなると、
絶食療法よりほかに手の着けよう
がなくなる。医者いしやの命令ばかりか、
病氣の性質そのものが、私にこの

絶食を余儀なくさせるのである。

だから病み始めより回復期に向つ

た時の方が、余計痩せこけてふら

ふらする。一カ月以上かかるのも

おもにこの衰弱が祟るからのよう

に思われる。

私の立居たちいが自由になると、黒杵くろわく

のついた摺物すりものが、時々私の机の上

に載せられる。私は運命を苦笑す

る人のごとく、絹帽シルクハットなどを被かぶつて、

葬式の供に立つ、俣くるまをか駆かつて齋場さいじょうへか駈かけつづける。死んだ人のうちに
は、御爺さんも御婆さんもあるが、
時には私よりも年齒としが若くつて、
平生からその健康を誇っていた人
も交まじっている。

私は宅へ帰つて机の前に坐つて、
人間の寿命は実に不思議なものだ
と考える。多病な私はなぜ生き残つ
ているのだろうかと思つて見る。

あの人はどういう訳で私より先に死んだのだろうかと思う。

私としてこういう黙想ふけに耽ふるの

はむしろ当然だといわなければならぬ。けれども自分の位地いちちや、

身体からだや、才能や すべて己おのれと

いうもののおり所を忘れがちな人間の一人いちにんとして、私は死なないのが当り前だと思ひながら暮らして

いる場合が多い。読経どくぎょうの間ですら、

焼香の際ですら、死んだ仏のあとに生き残った、この私という形骸けいがいを、ちつとも不思議と心得ずに澄ましている事が常である。

或人が私に告げて、「他の死ひとぬのは当り前のように見えますが、

自分が死ぬという事だけはとてもしっかり考えられません」と云った事がある。戦争に出た経験のある男に、

「そんなに隊のものが続々斃たおれる

のを見ていながら、自分だけは死
なないと思っ
ていられますか」と
聞いたら、その人は「いられます
ね。おおかた死ぬまでは死なない
と思っ
てるんでしょう」と答えた。
それから大学の理科に
関係のある
人に、飛行機の話
を聴かされた時
に、こんな問答をした覚えもある。
「ああして始終しじゆう落ちたり死んだり
したら、後から乗るものは怖こわいだ

ろうね。今度はおれの番だという
気になりそうなものだが、そうで
ないかしら」

「ところがそうでないと見えます」

「なぜ」

「なぜって、まるで反対の心理状
態に支配されるようになるらしい
のです。ヤッぱりあいつは墜落し
て死んだが、おれは大丈夫だとい
う気になると見えますね」

私も恐らくこういう人の気分で、比較的平気にしていられるのだろう。それもそのはずである。死ぬまでは誰も生きているのだから。

不思議な事に私の寝ている間には、黒^{くろ}枠^{わく}の通知がほとんど来ない。去年の秋にも病気が癒^{なお}った後^{あと}で、三四人の葬儀に列したのである。

その三四人の中に社の佐藤君も這^は入^いっていた。私は佐藤君がある宴

会の席で、社から貰った銀盃ぎんぱいを持つて来て、私に酒を勧めすすてくれた事を思い出した。その時彼の踊った変な踊もまだ覚えている。この元気なくつぎょう崛強とむらいな人の葬式とむらいに行った私は、彼が死んで私が生残なまごりっているのを、別段の不思議とも思わずにいる時の方が多おほいい。しかし折々考えると自分の生きている方が不自然ふぜんぜんのよううな心持にもなる。そうして運命

がわざと私を愚弄ぐろうするのではない
かしらと疑いたくなる。

二十三

今私の住んでいる近所に喜久井きくいちよ
町うという町がある。これは私の生
れた所だから、ほかの人よりもよ
く知っている。けれども私が家を
出て、方々漂浪ひょうろうして帰って来た時

には、その喜久井町がだいぶ広がって、いつの間にか根来ねごろの方まで延びていた。

私に縁故の深いこの町の名は、あまり聞き慣れて育ったせいか、ちつとも私の過去を誘い出す懐なつかしい響を私に与えてくれない。しかし書齋ひとに独り坐つて、頬杖ほおづえを突いたまま、流れを下る舟のように、心を自由に遊ばせておくと、時々

私の聯想れんそうが、喜久井町の四字には
たりと出会ったなり、そこでしば
らくていかい廻し始める事がある。

この町は江戸と云った昔には、
多分存在していなかったものらし
い。江戸が東京に改まった時か、
それともずっと後のちになつてからか、
年代はたしかに分らないが、何で
も私の父が拵いじらえたものに相違ない
のである。

私の家の定紋じょうもんが井桁いげたに菊なので、
それにちなんだ菊に井戸を使つて、
喜久井町としたという話は、父自
身の口から聴いたのか、または他
のものから教おすわつたのか、何しろ
今でもまだ私の耳に残っている。
父は名主なぬしがなくなつてから、一時
区長という役を勤めていたので、
あるいはそんな自由も利きいたかも
知れないが、それを誇ほこりにした彼の

虚栄心を、今になつて考えて見る
と、厭いやな心持は疾とくに消え去つて、
ただ微笑したくなるだけである。

父はまだその上に自宅の前から
南へ行く時には是非共登らなければ
ならない長い坂に、自分の姓の夏
目という名をつけた。不幸にして
これは喜久井町ほど有名にならず
に、ただの坂として残っている。
しかしこの間、或人が来て、地図

でこの辺の名前を調べたら、夏目坂というのがあったと云って話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立っているのかも知れない。

私が早稲田わせだに帰って来たのは、東京を出てから何年ぶりになるだろう。私は今の住居すまいに移る前、家うちを探す目的であつたか、また遠足の帰り路であつたか、久しぶりで

偶然私の旧家の横へ出た。その時表から二階の古瓦が少し見えたので、まだ生き残っているのかしらと思っただけ、私はそのまま通り過ぎてしまった。

早稲田に移ってから、私はまたその門前を通って見た。表から覗くところ、何だかもとと変わらないような気もしたが、門には思いも寄らない下宿屋の看板が懸っていた。

私は昔の早稲田田圃たんぼが見たかった。
しかしそこはもう町になっていた。
私は根来ねごろの茶畠ちやばたけと竹藪たけやぶを一目眺めひとめ
たかった。しかしその痕迹こんせきはどこ
にも発見する事ができなかつた。

多分この辺だろうと推測した私の
見当けんとうは、当っているのか、外はずれて
いるのか、それさえ不明であつた。
私は茫然ぼうぜんとして佇立ちよりつした。なぜ

私の家だけが過去の残骸ざんがいのごとく

に存在しているのだろう。私は心のうちで、早くそれが崩れてしまえば好いのにと思った。

「時」は力であった。去年私が高田の方へ散歩したついでに、何気なくそこを通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壊されて、そのあとに新らしい下宿屋が建てられつつあった。その傍には質屋もできていた。質屋の前に疎らな囲をして、

その中に庭木が少し植えてあつた。
三本の松は、見る影もなく枝を刈
り込まれて、ほとんど畸形児きけいじのよ
うになつていたが、どこか見覚みおぼえの
あるような心持を私に起させた。

昔むかし「影参差松三本の月夜かな」

と咏うたつたのは、あるいはこの松の
事ではなかつたろうかと考えつつ、
私はまた家に帰つた。

「そんな所に生おい立たつて、よく今こん

日にちまで無事にすんだものですね」

「まあどうかこうか無事にやっ
て来きました」

私達の使った無事という言葉は、
男なん女にょの間に起る恋の波は瀾らんがないと
いう意味で、云わば情事の反対を
指さしたようなものであるが、私の

追窮心ついきゆうしんは簡単なこの一句の答で満足できなかつた。

「よく人が云いますね、菓子屋へ奉公すると、いくら甘いものの好きな男でも、菓子が厭いやになるって、御彼岸おひがんに御萩おはぎなどを拵うしらえているところを宅うちで見ているも分るじゃありませんか、拵えるものは、ただ御萩を御重おじゆうに詰めるだけで、もうげんなりした顔をしているくらい

だから。あなたの場合もそんな訳
なんですか」

「そういう訳でもないようです。

とにかく廿歳はたち少し過ぎまでは平気
でいたのですから」

その人はある意味において好男
子であつた。

「たといあなたが平気でいても、
相手が平気でいない場合がないと
も限らないじゃありませんか。そ

んな時には、どうしたって誘われさそがちになるのが当り前でしよう」「

「今からふり返って見ると、なるほどこういう意味でああいう事をしたのだとか、あんな事を云ったのだとか、いろいろ思い当る事がないでもありません」

「じゃ全く気がつかずにいたのですね」

「まあそうです。それからこちら

で気のついたのも一つありました。
しかし私の心はどろいとしても、その
相手に惹ひきつけられる事ができな
かったのです」

私はそれが話の終りかと思った。

二人の前には正月の膳ぜんが据すえてあつ
た。客は少しも酒を飲まないし、
私もほとんど盃さかずきに手を触れなかつ
たから、献酬けんしゅうというものは全くな
かった。

「それだけで今日まで経過して来られたのですか」と私は吸物をすすりながら念のために訊きいて見た。すると客は突然こんな話を私にして聞かせた。

「まだ使用人であつた頃に、ある女と二年ばかり会つていた事があります。相手は無論素人しらひつとではないのでした。しかしその女はもういないのです。首を縊くつて死んでし

まっただのです。年は十九でした。

十日ばかり会わないでいるうちに
死んでしまっただのです。その女に
はね、旦那だんなが二人あつて、双方が
意地いぢづくで、身受せうじゆの金を競せり上あげ
にかかつたのです。それに双方共
老妓らうきを味方あつちにして、こつちへ来い、
あつちへ行くなと義理責ぎりせめにもした
らしいのです。……」

「あなたはそれを救つてやる訳に

行かなかったのですか」

「当時の私は丁稚でっちの少し毛の生えはたようなもので、とてもどうもできな「きないのです」

「しかしその芸妓げいしやはあなたのために死んだのじゃありませんか」

「さあ……。一度に双方の旦那に義理を立てる訳に行かなかったからかも知れませんが。……しかし私ら二人の間に、どこへも行かな

いという約束はあつたに違ないの
です」

「するとあなたが間接にその女を
殺した事になるのかも知れませんが
ね」

「あるいはそうかも知れません」

「あなたは寝覚ねぢめが悪かありません
か」

「どうも好くないのです」

元日に込み合こあった私の座敷は、

二日になつて淋さびしいくらい静かであつた。私はその淋しい春の松の内に、こつこつという憐あわれな物語りを、その年賀の客から聞いたのである。客は真面目まじめな正直な人だつたから、それを話すにも、ほとんど艶つやつぽい言葉を使わなかつた。

私がまだ千駄木にいた頃の話だから、年数にすると、もうだいぶ古い事になる。

或日私は切通きりどおしの方へ散歩した
帰りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲った。その曲り角にはその頃あつた牛屋ぎゅううちやの傍そばに、寄席よせの看板がいつでも懸かつていた。

雨の降る日だったので、私は無

論傘^{かさ}をさしていた。それが鉄御納^{てつおなん}戸^どの八間^{はちけん}の深張^{ふかぢやう}で、上^{かみ}から洩^もつてくる霰^{しゆう}が、自然木^{じねんぼく}の柄^えを伝わ^{つた}つて、私の手^てを濡^ぬらし始めた。人^{ひと}通りの少ない^{すくない}この小路^{こうじ}は、すべて^{すべて}の泥^{どろ}を雨^{あめ}で洗^{せん}い流^{なが}したように、足駄^{あしだ}の齒^はに引^ひつ懸^かる汚^{きた}ないものはほとんどなかつた。それでも上^{かみ}を見れば暗^{くら}く、下^{した}を見れば佗^わびしかつた。始^{はじめ}終^{ゆう}通り^{通り}つけているせいでもあるろう

が、私の周囲には何一つ私の眼を惹くものは見えなかった。そうして私の心はよくこの天気とこの周囲に似ていた。私には私の心を腐蝕するような不愉快な塊が常にあった。私は陰鬱な顔をしながら、ぼんやり雨の降る中を歩いていた。

日蔭町の寄席の前まで来た私は、突然一台の幌俵に出合った。私と俵の間には何の隔りもなかったの

で、私は遠くからその中に乗って
いる人の女だという事に気がつい
た。まだセルロイドの窓なので
きない時分だから、車上の人
は遠くからその白い顔を私に見
せていたのである。

私の眼にはその白い顔が大変美
しく映った。私は雨の中を歩
きながらじつとその人の姿に
見惚れていた。同時にこれは芸
者だろうと

いう推察が、ほとんど事実のよう
に、私の心に働らきかけた。する
と俣が私の一間ばかり前へ来た時、
突然私の見ていた美しい人が、鄭てい
寧ねいな会釈えしやくを私にして通り過ぎた。

私は微笑に伴なうその挨拶あいさつとともに、
相手が、大塚楠緒おおつかくすおさんであつ
た事に、始めて気がついた。

次に会ったのはそれから幾いく日かめ目
だつたらうか、楠緒くすおさんが私に、

「この間は失礼しました」と云ったので、私は私のありのままを話す気になつた。

「実はどこの美しくい方かかたと思つて見ていました。芸者じゃないかしらとも考えたのです」

その時楠緒さんが何と答えたか、私はたしかに覚えていないけれども、楠緒さんはちつとも顔を赧あからめなかつた。それから不愉快な表

情も見せなかつた。私の言葉をただそのままに受け取つたらしく思われた。

それからずっと経つて、ある日楠緒さんがわざわざ早稲田へ訪ねて来てくれた事がある。しかるにあいにく私は妻と喧嘩をしていた。私は厭な顔をしたまま、書齋にじつと坐っていた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして帰って行った。

その日はそれですんだが、ほどなく私は西片町へ詫あやまりに出かけた。

「実は喧嘩をしていたのです。妻も定めて無愛想でしたろう。私もまた苦々にがにがしい顔を見せるのも失礼だと思つて、わざと引込ひっこんでいたのです」

これに対する楠緒さんの挨拶あいさつも、今では遠い過去になつて、もう呼

び出す事のできないほど、記憶の底に沈んでしまった。

楠緒さんが死んだという報知の来たのは、たしか私が胃腸病院に
いる頃であつた。死去の広告中に、
私の名前を使つて差支さしつかえないかと電
話で問い合された事などもまだ覚
えている。私は病院で「ある程の
菊投げ入れよ棺かんの中」という手向たむけ
の句を楠緒さんのために咏よんだ。

それを俳句の好きなある男が嬉しうれし
がって、わざわざ私に頼んで、短
冊に書かせて持って行つたのも、
もう昔になつてしまつた。

二十六

益ますさんがどうしてそんなに零落おちぶれ
たものか私には解らない。何しろ
私の知っている益さんは郵便脚夫

であつた。益さんの弟の庄さんも、
家を潰して私の所へ転がり込んで
食客になつていたが、これはまだ
益さんよりは社会的地位が高かつ
た。小供の時分本町の鰯屋へ奉公
に行つていた時、浜の西洋人が可
愛がつて、外国へ連れて行くと云つ
たのを断つたのが、今考えると残
念だなどと始終話していた。

二人とも私の母方の従兄に当る

男だつたから、その縁故で、益さんおとこは弟に会うため、また私の父に敬意を表するため、月に一遍ぐらいは、牛込の奥まで煎餅せんべいの袋などを手土産てみやげに持って、よく訪ねて来た。

益さんはその時何でも芝はらの外れか、または品川近くに世帯を持つて、一人暮らしの呑気のんきな生活を営んでいたらしいので、宅うちへ来るとよ

く泊まっで行った。たまに帰ろう
とすると、兄達が寄つてたかつて、
「帰ると承知しないぞ」などと威おど
嚇かしたものである。

当時二番目と三番目の兄は、ま
だ南校なんこうへ通つていた。南校とい
うのは今の高等商業学校の位置にあつ
て、そこを卒業すると、開成学校
すなわち今日こんにちの大学へ這入はいる組織そしよく
になつていたものらしかった。彼

らは夜になると、玄関に桐きりの机を
並べて、明日あしたの下読したよみをする。下読
と云ったところで、今の書生のや
るのとはだいぶ違っていた。グー
ドリッチの英国史といったような
本を、一節ぐらいずつ読んで、そ
れからそれを机の上へ伏せて、口
の内で今読んだ通りを暗誦あんじョウするの
である。

その下読が済むと、だんだん益

さんが必要になつて来る。庄さん
もいつの間にかそこへ顔を出す。

一番目の兄も、きげん機嫌の好い時は、

わざわざ奥から玄関まで出張でばつて

来る。そうしてみんないつしよに

なつて、益さんに調戯からかい始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配
達する事もあるだろう」

「そりゃ商売だから厭いやだつて仕方が
ありません、持つて行きますよ」

「益さんは英語ができるのかね」

「英語ができるくらいならこんな

真似まねをしちゃいけません」

「しかし郵便ツとか何とか大きな

声を出さなくつちやならないだろ

「う

「そりゃ日本語で間に合いますよ。

異人だつて、近頃は日本語が解り

ますもの」

「へええ、向むかひでも何とか云うのか

ね
「

「云いますとも。ペロリの奥さん
なんか、あなたよろしいありがとう
うと、ちゃんと日本語で挨拶あいさつをす
るくらいです」

みんなは益さんをいじりまでおび
き出しておいて、どつと笑うので
ある。それからまた「益さん何て
云うんだって、その奥さんは」と
何遍も一つ事を訊きいては、いつま

でも笑いの種にしよつと巧たくらんで
かかる。益さんもしまいには苦笑
いをして、とつとつ、「あなたよろ
しい」をやめにしてしまつ。する
と今度は「じゃ益さん、野中のなかのいつ
本杉ほんすぎをやつて御覧よ」と誰かが云
い出す。

「やれつたつて、そつおいそれと
やれるもんじゃありません」

「まあ好いから、おちりよ。いよ

いよ野中の一本杉の所まで参りま
すよ……」

益さんはそれでもにやにやして
応じない。私はとうとう益さんの
野中の一本杉というものを聴きかず
にしまった。今考えると、それは
何でも講釈にんじょうばなしか人情にんじょうの一節じゃな
いかしらと思っ。う。

私の成人する頃には益さんもも
う宅うちへ来なくなつた。おおかた死

んだのだろう。生きていれば何か
消息たよりのあるはずである。しかし死
んだにしても、いつ死んだのか私
は知らない。

二十七

私は芝居というものに余り親し
みがない。ことに旧劇は解らない。
これは古来からその方面で発達し

て来た演芸上の約束を知らないの
で、舞台の上に^{かいてん}開展される特別の
世界に、同化する能力が私に欠け
ているためだとも思う。しかしそ
ればかりではない。私が旧劇を見
て、最も異様に感ずるのは、役者
が自然と不自然の間を、どっちつ
かずにぶらぶら歩いている事であ
る。それが私に、^{ちゅういし}中腰と云ったよ
うな落ちつけない心持を引き起さ

せるのも恐らく理の当然なのだろう。

しかし舞台の上に子供などが出て来て、甲かんの高い声で、憐あわれっぽい事などを云う時には、いかな私でも知らず知らず眼に涙が滲にじみ出る。そうしてすぐ、ああ騙だまされたなと後悔する。なぜあんなに安っぽい涙を零こぼしたのだろうと思う。「どっと思ってても騙されて泣くのは

厭だ^{いや}」と私はある人に告げた。芝居好のその相手は、「それが先生の常態なんでしょう。平生涙を控^{ひか}え目^めにしているのは、かえってあなたのよそゆきじゃありませんか」と注意した。

私はその説に不服だったので、いろいろの方面から向^{むこ}を納得させようとしているうちに、話題がいつか絵画の方に滑^{すべ}って行つた。そ

の男はこの間参考品として美術協
会に出た若冲じやくちゆうの御物ぎよぶつを大変に嬉しうれ
がって、その評論をどこかの雑誌
に載せるとかいう噂しわやであつた。私
はまたあの鶏の図がすこぶる気に
入らなかつたので、ここでも芝居
と同じような議論が二人の間に起つ
た。

「いつたい君に画えを論ずる資格は
ないはずだ」と私はついに彼を罵のの

倒した。するとこの一言が本になつて、彼は芸術一元論を主張し出した。彼の主意をかいつまんで云々と、すべての芸術は同じ源から湧いて出るのだから、その内の一つさえうんと腹に入れておけば、他は自ずから解し得られる理窟だといふのである。座にいる人のうちで、彼に同意するものも少なくなかった。

「じゃ小説を作れば、自然柔道も旨うまくなるかい」と私が笑談しょうたん半分に云った。

「柔道は芸術じゃありませんよ」と相手も笑いながら答えた。

芸術は平等観から出立するのではない。よしそこから出立するにしても、差別観さべつかんに入いって始めて、花が咲くのだから、それを本来の昔へ返せば、絵も彫刻も文章も、

すっかり無に帰してしまふ。そこに何で共通のものがあるう。たとい有つたにしたところで、實際の役には立たない。彼我共通の具體的のものなどの発見もできるはずがない。

こういうのがその時の私の論旨ろんしであつた。そうしてその論旨はけつして充分なものではなかつた。もつと先方の主張を取り入れて、周到

な解釈を下^{くだ}してやる余地はいくらでもあつたのである。

しかしその時座にいた^{いちにん}一人が、

突然私の議論を引き受けて相手に
向い出したので、私も面倒だから
ついそのままにしておいた。けれ
ども私の代りになつたその男とい
うのはだいぶ酔っていた。それで
芸術がどうだの、文芸がどうだの
と、しきりに弁ずるけれども、あ

まり要領を得た事は云わなかつた。
言葉遣いづかさえ少しへべれけであつた。
初めのうちは面白がつて笑つていた人達も、ついには黙つてしまつた。

「じゃ絶交しよう」などと酔つた男がしまいに云い出した。私は「絶交するなら外でやってくれ、ここでは迷惑だから」と注意した。「じゃ外へ出て絶交しようか」と

酔った男が相手に相談を持ちかけたが、相手が動かないので、とうとうそれぎりになってしまった。

これは今年の元日の出来事である。酔った男はそれからちよいちよい来るが、その時の喧嘩けんかについては一口も云わない。

ある人が私の家の猫うちを見て、

「これは何代目の猫ですか」と訊き
いた時、私は何気なく「二代目
です」と答えたが、あとで考えると、
二代目はもう通り越して、その実じつ
三代目になっていた。

初代は宿なしであつたにかかわ
らず、ある意味からして、だいた
有名になつたが、それに引きかえ
て、二代目の生涯しょうがいは、主人にさえ

忘れられるくらい、短命だった。

私は誰がそれをどこから貰って来たかよく知らない。しかし手の掌ひらに載せれば載せられるような小さいかっこう恰好をして、彼がそこいら中じゅうほう這い廻っていた当時を、私はまだ記憶している。この可憐な動物は、ある朝家のものが床を揚あげる時、誤って上から踏み殺してしまった。ぐうという声がしたので、蒲団ふとんの

下に潜り込んでいる彼をすぐ引き出して、相当の手当をしたが、もう間に合わなかった。彼はそれから一日二日してついに死んでしまった。その後へ来たのがすなわち真黒な今の猫である。

私はこの黒猫を可愛がっても憎がってもいない。猫の方でも宅中のそのそ歩き廻るだけで、別に私の傍へ寄りつこうという好意を現

わした事がない。

ある時彼は台所の戸棚とだなへ這入っ

て、鍋なべの中へ落ちた。その鍋の中

には胡麻ごまの油がいつぱいあつたの

で、彼の身体からだはコスメチックでも

塗りつけたように光り始めた。彼

はその光る身体で私の原稿紙の上

に寝たものだから、油がずっと下

まで滲しみ通とおつて私をずいぶんな目

に逢あわせた。

去年私の病気をする少し前に、
彼は突然皮膚病に罹^かつた。顔から
額へかけて、毛がだんだん抜けて
来る。それをしきりに爪で搔^かくも
のだから、瘡蓋^{かさぶた}がぼろぼろ落ちて、
痕^{あと}が赤裸^{あかはだか}になる。私はある日食事
中この見苦しい様子を眺^いめて厭^{いや}な
顔をした。

「ああ瘡蓋^{かさぶた}を零^{こぼ}して、もし小供に
でも伝染するといけないから、病

院へ連れて行って早く療治をしてやるがいい」

私は家のものうちにこづいたが、

腹の中では、ことによると病気が病気だから全治しまいとも思った。

昔むかし私の知っている西洋人が、あ

る伯爵から好い犬を貰って可愛かわいがっ

ていたところ、いつかこんな皮膚病に悩まされ出したので、気の毒だからと云って、医者に頼んで殺

して貰った事を、私はよく覚えていたのである。

「クロロフォームか何かで殺してやった方が、かえって苦痛がなくなつて仕合せだろう」

私は三四度同さんよたびじ言葉を繰くり返かえして見たが、猫がまだ私の思う通りにならないうちに、自分の方が病気でどっと寝てしまった。その間私はついに彼を見る機会をもたな

かった。自分の苦痛が直接自分を支配するせいか、彼の病気を考える余裕さえ出なかった。

十月に入^いって、私はようやく起きた。そうして例のごとく黒い彼を見た。すると不思議な事に、彼の醜い赤裸の皮膚にもそのような黒い毛が生^はえかかっていた。

「おや癒^なるのかしら」

私は退屈な病後の眼を絶えず彼

の上に注いでいた。すると私の衰弱がだんだん回復するにつれて、彼の毛もだんだん濃くなって来た。それが平生の通りになると、今度は以前より肥え始めた。

私は自分の病気の経過と彼の病気の経過とを比較して見て、時々そこに何かの因縁いんねんがあるような暗示を受ける。そうしてすぐその後から馬鹿らしいと思つて微笑する。

猫の方ではただにやにや鳴くばかりだから、どんな心持でいるのか私にはまるで解らない。

二十九

私は両親の晩年になつてできたいわゆる末^{すえ}子^こである。私を生んだ時、母はこんな年^{とし}齒^しをして懐妊するのは面目ないと云つたとかい

う話が、今でも折々は繰^くり返^{かえ}され
ている。

単にそのためばかりでもあるま
いが、私の両親は私が生れ落ちる
と間もなく、私を里にやってしまっ
た。その里というのは、無論私の
記憶に残っているはずがないけれ
ども、成人の後^{のち}聞いて見ると、何
でも古道具の売買を渡^{とせ}世^いにしてい
た貧しい夫婦ものであつたらしい。

私はその道具屋の我楽多がらくたといっ
しよに、小さい筈はずの中に入れられ
て、每晚四谷よつやの大通りの夜店に曝さら
されていたのである。それをある
晩私の姉が何かのついでにそこを
通りかかった時見つけて、可哀想かわいそう
とでも思ったのだらう、懐ふところへ入れ
て宅うちへ連れて来たが、私はその夜
どうしても寝つかずに、とうとう
一晩中泣き続けに泣いたとかいう

ので、姉は大いに父から叱しかられた
そうである。

私はいつ頃ころその里から取り戻さ
れたか知らない。しかしじきまた
ある家へ養子にやられた。それは
たしか私の四つの歳であつたよう
に思う。私は物心のつく八九歳ま
でそこで成長したが、やがて養家
に妙なごたごたが起つたため、再
び実家へ戻るような仕儀となつた。

浅草から牛込へ遷うつされた私は、
生れた家うちへ帰ったとは気がつかず
に、自分の両親をもと通り祖父母
とのみ思っていた。そうして相変
らず彼らを御爺おじいさん、御婆おばあさんと
呼んで毫ちひも怪しまなかつた。向むかで
も急に今までの習慣を改めるのが
変だと考えたものか、私にそう呼
ばれながら澄ました顔をしていた。
私は普通の末すえツ子このようにつ

して両親から可愛かわいがられなかった。
これは私の性質が素直すなおでなかった
ためだの、久しく両親に遠ざかっ
ていたためだの、いろいろの原因
から来ていた。とくに父からはむ
しろ苛酷かこくに取扱かわれたという記
憶がまだ私の頭に残っている。そ
れだのに浅草から牛込へ移された
当時の私は、なぜか非常に嬉うれしかつ
た。そうしてその嬉しさが誰の目

にもつくくくらいに著るしく外へ現
われた。

馬鹿な私は、本当の両親を爺婆じいばば

とのみ思い込んで、どのくらいのの

月日を空くうに暮らしたものだろう、

それを訊きかれるとまるで分らない

が、何でも或夜こんな事があつた。

私がひとり座敷に寝ていると、

枕元の所で小さな声を出して、し
きりに私の名を呼ぶものがある。

私は驚ろいて眼を覚さましたが、周あた
囲りが真暗まっくらなので、誰たれがそこに蹲うずくま居まつ
ているのか、ちよつと判断がつか
なかつた。けれども私は小供だか
らただじつとして先方の云う事だ
けを聞いていた。すると聞いてい
るうちに、それが私の家うちの下女の
声である事に気がついた。下女は
暗い中で私わたしに耳語みみごをするようにこ
ういふのである。

「あなたが御爺さん御婆さんだと
思っていらっしやる方は、本当は
あなたの御父おとうさんと御母おつかさんなの
ですよ。先刻さつきね、おおかたそのせ
いであんなにこっちの宅うちが好なん
だろう、妙なものだな、と云って
二人で話していらしつたのを私が
聞いたから、そつとあなたに教え
て上げるんですよ。誰にも話しちや
いけませんよ。よゝいぢいんすか」

私はその時ただ「誰にも云わな
いよ」と云つたぎりだつたが、心
の中では大變嬉うちしかつた。そうし
てその嬉しさは事実を教えてくれ
たからの嬉しさではなくつて、単
に下女が私に親切だつたからの嬉
しさであつた。不思議にも私はそ
れほど嬉しく思つた下女の名も顔
もまるで忘れてしまつた。覚えて
いるのはただその人の親切だけで

ある。

三十

私がこうして書齋に坐すわっている
と、来る人の多くが「もう御病気
はすっかり御癒おなりですか」と尋ね
てくれる。私は何度も同じ質問を
受けながら、何度も返答に躊躇ちゆじし
た。そうしてその極きよくいつでも同じ

言葉を繰り返すようになった。それは「ええまあどうかどうか生きています」という変な挨拶に異ならなかった。

どうかどうか生きています。

私はこの一句を久しい間使用した。しかし使用すること、何だか不穏当な心持がするので、自分でも実はやめられるならばと思って考えてみたが、私の健康状態を云い

現わすべき適当な言葉は、他にど
うしても見つからなかった。

ある日T君が来たから、この話
をして、癒なおったとも云えず、癒ら
ないとも云えず、何と答えて好い
か分らないと語ったら、T君はす
ぐ私にこんな返事をした。

「そりゃ癒ったとは云われません
ね。そう時々再発するようじゃ。
まあもとの病気の継続なんでしょ

「う」

この継続という言葉を見た時、私は好い事を教えられたような気がした。それから以後は、「どうにかこうか生きています」という挨拶あいさつをやめて、「病気はまだ継続中です」と改ためた。そうしてその継続の意味を説明する場合には、必ず歐洲の大乱を引合ひきあいに出した。

「私はちようど独乙ドイツが聯合軍れんごうぐんと戦

争をしているように、病氣と戦争
をしているのです。今こうやって
あなたと対坐していただけるのは、
天下が太平になつたからではない
ので、塹壕ざんごうの中に這入はいつて、病氣
と睨めにらつくらをしているからです。
私の身体からだは乱世です。いつどんな
変へんが起らないとも限りません」

或人は私の説明を聞いて、面白
そうにははと笑つた。或人は黙つ

ていた。また或人は気の毒らしい顔をした。

客の帰ったあとで私はまた考えた。継続中のものはおそろく

私の病気ばかりではないだろう。

私の説明を聞いて、笑談じょうたんだと思っ

て笑う人、解らないで黙っている

人、同情の念に駆かられて気の毒ら

しい顔をする人、すべてこれ

らの人の心の奥には、私の知らな

い、また自分達さえ気のつかない、
継続中のものがいくらでも潜^{ひそ}んで
いるのではなからうか。もし彼ら
の胸に響くような大きな音で、そ
れが一度に破裂したら、彼らはは
たしてどう思うだろう。彼らの記
憶はその時もはや彼らに向って何
物をも語らないだろう。過去の自
覚はとくに消えてしまっているだ
ろう。今と昔とまたその昔の間に

何らの因果を認める事のできない
彼らは、そういう結果に陥^{おちい}つた時、
何と自分を解釈して見る気だろう。
所詮^{しょせん}我々は自分で夢の間^まに製造し
た爆裂弾を、思い思いに抱^{いだ}きなが
ら、一人残らず、死という遠い所
へ、談笑しつつ歩いて行くのでは
なからうか。ただどんなものを抱^だ
いているのか、他^{ひと}も知らず自分も
知らないので、仕合せなんだろう。

私は私の病気が継続であるとい
う事に気がついた時、
歐洲の戦争
もおそらくいつの世からかの継続
だろうと考えた。けれども、それ
がどこからどう始まって、どう曲
折して行くかの問題になると全く
無知識なので、継続という言葉
を解しない一般の人を、私はかえつ
て羨ましく思っている。

私がまだ小学校に行っていた時
分に、喜きいちゃんという仲の好い
友達があつた。喜いちゃんは当時
中町なかちょうの叔父さんの宅うちにいたので、
そみちのりう道程の近くない私の所からは、
毎日会いに行く事が出来悪にくかつた。
私はおもに自分の方から出かけな
いで、喜いちゃんの来るのを宅で

待っていた。喜いちゃんはいくら
私が行かないでも、きつと向うか
ら来るにきまっていた。そうして
その来る所は、私の家の長屋を借
りて、紙や筆を売る松さんの許もとで
あった。

喜いちゃんには父ちちは母ははがないよう
だったが、小供の私には、それが
いっこう不思議とも思われなかつ
た。おそらく訊きいて見た事もなかつ

たろう。したがって喜いちちゃんが
なぜ松さんの所へ来るのか、その
訳さえも知らずにいた。これはずつ
と後で聞いた話であるが、この喜
いちちゃんの御父さんおとうというのは、
昔むかし銀座の役人か何かをしていた
時、贖金にせがねを造ったとかいう嫌疑けんぎを
受けて、入牢じゅうろうしたまま死んでしまっ
たのだという。それであとに取り
残された細君が、喜いちちゃんを先せん

夫^ぶの家へ置いたなり、松さんの所へ再縁したのだから、喜いちやんが時々生^うみの母に会いに来るのは当り前の話であつた。

何にも知らない私は、この事情を聞いた時ですら、別段変な感じも起さなかつたくらいだから、喜いちやんとふざけまわつて遊ぶ頃に、彼の境遇などを考えた事はただの一度もなかつた。

喜いちゃんも私も漢学が好きだったので、解りもしない癖くせに、よく文章の議論などをして面白がった。彼はどこから聴いてくるのか、調べてくるのか、よくむずかしい漢籍の名前などを挙あげて、私を驚あろかす事が多かった。

彼はある日私の部屋同様になつてゐる玄関に上り込んで、懐ふところから二冊つづきの書物を出して見せた。

それは確たしかに写本であつた。しかも漢文で綴つづつてあつたように思う。

私は喜いちちゃんから、その書物を受け取つて、無意味にそこそこを引ひつ繰返くりかえして見ていた。実は何が何だか私にはさっぱり解らなかつたのである。しかし喜いちちゃんは、それを知つてるかなどと露骨な事をいう性質たではなかつた。

「これは太田南畝おおたなんぼの自筆なんだが

ね。僕の友達がそれを売りたいと
いうので君に見せに来たんだが、
買ってやらないか」

私は太田南畝という人を知らな
かった。

「太田南畝っていつたい何だい」

「しよくさんじん蜀山人の事さ。有名な蜀山人さ」

無学な私は蜀山人という名前さ
えまだ知らなかった。しかし喜い
ちちゃんにそう云われて見ると、何

だか貴重の書物らしい気がした。

「いくらなら売るのがかい」と訊きいて見た。

「五十銭に売りたいと云うんだがね。どうだろう」

私は考えた。そうして何しろ価ね切ぎつて見るのが上策だと思いついた。

「二十五銭なら買つても好い」

「それじゃ二十五銭でも構わない

から、買ってやりたまえ」

喜いちゃんはこう云いつつ私が
ら二十五銭受取っておいて、また
しきりにその本の効能を述べ立て
た。私には無論その書物が解らな
いのだが、それほど嬉しくもな
かつたけれども、何しろ損はしな
いだろうというだけの満足はあつ
た。私はその夜南畝^{なんぼしゆうげん}莠言^{うげん}
たし
かそんな名前だと記憶しているが、

それを机の上に載せて寝た。

三十二

翌日あくるひになると、喜いちゃんがま
たぶらりとやって来た。

「君昨日きのう買って貰った本の事だが
ね」

喜いちゃんはそれだけ云って、
私の顔を見ながらぐずぐずして

る。私は机の上に載せてあつた書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本がどうかしたのかい」

「実はあすこの宅うちの阿爺おやじに知れたものだから、阿爺が大変怒つてね。

どうか返して貰つて来てくれつて僕に頼むんだよ。僕も一遍君に渡したもんだから厭いやだつたけれども仕方がないからまた来たのさ」

「本を取りにかい」

「取りにつて訳でもないけれども、もし君の方で差支さしつかえがないなら、返してやってくれないか。何しろ二十五銭じゃ安過ぎるっていうんだから」

この最後の一言いちごんで、私は今まで安く買い得たという満足の裏に、ぼんやり潜ひそんでいた不快、不善の行為から起る不快を判然はつきり

自覚し始めた。そうして一方では
狡猾ずるい私を怒いかると共に、一方では
二十五銭で売った先方を怒った。

どうしてこの二つの怒りを同時に
和やわらげたものだろう。私は苦にがい顔
をしてしばらく黙っていた。

私のこの心理状態は、今の私が
小供の時の自分を回顧して解剖す
るのだから、比較めいじょう的明瞭びょうりょうに描き出
されるようなものの、その場合の

私にはほとんど解らなかつた。私
さえただ苦い顔をしたという結果
だけしか自覚し得なかつたのだか
ら、相手の喜いちちゃんには無論そ
れ以上解るわかはずがなかつた。括弧かっこ
の中でいうべき事かも知れないが、
年齢としを取つた今日こんにちでも、私にはよ
くこんな現象が起つてくる。それ
でよく他ひとから誤解される。

喜いちちゃんは私の顔を見て、

「二十五銭では本当に安過ぎるんだとさ」と云った。

私はいきなり机の上に載せておいた書物を取って、喜いちちゃんの前に突き出した。

「じゃ返そう」

「どうも失敬した。何しろ安公やすこうの持ってるものでないんだから仕方がない。阿爺おやじの宅うちに昔からあったやつを、そつと売って小遣こづかいにしよ

うって云うんだからね」

私はぶりぶりして何とも答えな
かった。喜いちちゃんふところは袂から二十
五銭出して私の前へ置きかけたが、
私はそれに手を触れようとしてもしな
かった。

「その金なら取らないよ」

「なぜ」

「なぜでも取らない」

「そうか。しかしつまらないじゃ

ないか、ただ本だけ返すのは。本
を返すくらいなら二十五銭も取り
たまいな」

私はたまらなくなつた。

「本は僕のものだよ。いったん買つ
た以上は僕のものにきまつてるじゃ
ないか」

「そりゃそうに違いない。違いな
いが向の宅むこううちでも困つてるんだから」
「だから返すと云つてるじゃない

か。だけど僕は金を取る訳がないんだ」

「そんな解らない事を云わずに、まあ取っておきたまいな」

「僕はやるんだよ。僕の本だけでも、欲しければやるうというんだよ。やるんだから本だけ持ってつたら好いじゃないか」

「そうかそんなら、そうしよう」「嬉しいちゃんは、とうとう本だけ

持つて帰った。そうして私は何の意味なしに二十五銭の小遣を取られてしまったのである。

三十三

世の中に住む人間の一人いちにんとして、私は全く孤立して生存する訳に行かない。自然他ひとと交渉の必要がどこからか起つてくる。時候の挨拶あいさつ、

用談、それからもつと込み入った
懸合かけあい これらから脱却する事は、
いかに枯淡な生活を送っている私
にもむずかしいのである。

私は何でも他のひという事を真まに受
けて、すべて正面から彼らの言語
動作を解釈すべきものだろうか。

もし私が持つて生れたこの単純な
性情に自己を託して顧みかえりないとす
ると、時々飛んでもない人から騙だま

される事があるだろう。その結果
蔭^{かげ}で馬鹿にされたり、冷評^{ひや}かされ
たりする。極端な場合には、自分
の面前でさえ忍ぶべからざる侮辱
を受けないとも限らない。

それでは他はみな擦^すれ枯^からしの
嘘吐^{うそつき}ばかりと思つて、始めから相
手の言葉に耳も借^かさず、心も傾^{かたむ}け
ず、或時はその裏面に潜^{ひそ}んでいる
らしい反対の意味だけを胸に収め

て、それで賢い^{かしこ}人だと自分を批評し、またそこに安住の地を見出し得るだろうか。そうすると私は人を誤解しないと限らない。その上恐るべき過失を犯す覚悟を、初^{しょ}手^てから仮定して、かからなければならぬ。或時は必然の結果として、罪のない他を侮辱するくらい厚顔を準備しておかなければ、事が困難になる。

もし私の態度をこの両面のどつちかに片づけようとする、私の心にまた一種の苦悶くもんが起る。私は悪い人を信じたくない。それからまた善よい人を少しでも傷きずけたくない。そうして私の前に現あわれて来る人は、ことごとく悪人でもなければ、またみんな善人とも思えない。すると私の態度も相手しだいでいろいろに変わって行かなければ

ならないのである。

この変化は誰にでも必要で、また誰でも実行している事だろうと思うが、それがはたして相手にぴたりと合って寸分間違のない微妙な特殊な線の上をあぶなげもなく歩いているだろうか。私の大いなる疑問は常にそこに蟠わたかまっている。私の僻ひがみを別にして、私は過去において、多くの人から馬鹿にされ

たという苦^{にが}い記憶をもっている。
同時に、先方の云う事や為^する事を、
わざと平たく取らずに、暗^{あん}にその
人の品性に恥を搔^かかしたと同じよ
うな解釈をした経験もたくさんあ
りはしまいかと思う。

他^{ひと}に対する私の態度はまずいま
での私の経験から来る。それから
前後の関係と四囲の状況から出る。

最後に、曖^{あいまい}昧な言葉ではあるが、

私が天から授かった直覚が何分か
働らく。そうして、相手に馬鹿に
されたり、また相手を馬鹿にした
り、稀まれには相手に彼相当な待遇を
与えたりしている。

しかし今までの経験というものは、
広いようで、その実じつはなはだ
狭い。ある社会の一部分で、何度
となく繰り返された経験を、他の
一部分へ持つて行くと、まるで通

用しない事が多い。前後の関係とか四囲の状況とか云ったところで、千差万別なのだから、その応用の区域が限られているばかりか、その実千差万別に思慮を廻らさなければ役に立たなくなる。しかもそれを廻らす時間も、材料も充分給与されていない場合が多い。

それで私はともすると事実あるのだが、またないのだが解らない、

極めてあやふやな自分の直覚きわとい
うものを主位に置いて、他を判断
したくなる。そうして私の直覚が
はたして当ったか当たらないか、要
するに客観的事実によって、それ
を確たしかめる機会をもたない事が多い。
そこにまた私の疑いが始終しじゆしむせのよ
うにかかって、私の心を苦しめて
いる。

もし世の中に全知全能ぜんちぜんのうの神があ

るならば、私はその神の前にひざま跪ず
いて、私にごうはつうたがいさしはさ毫髪ごうはつうたがいさしはさの疑を挟む余地も
ないほど明らかかな直覚を与えて、
私をこの苦悶くもんから解脱げだつせしめん事
を祈る。でなければ、この不明な
私の前に出て来るすべての人を、
玲瓏透徹れいろうつとつてつな正直ものに变化して、
私とその人との魂がぴたりと合う
ような幸福を授けたまわん事を祈
る。今の私は馬鹿で人にだま騙される

か、あるいは疑い深くて人を容れ
る事ができないか、この両方だけ
しかないような気がする。不安で、
不透明で、不愉快に充ちている。
もしそれが生涯しょうがつづくとするなら
ば、人間とはどんなに不幸なもの
だろう。

私が大学にいる頃教えたある文
学士が来て、「先生はこの間高等
工業で講演をなすつたそうですね」
というから、「ああやった」と答
えると、その男が「何でも解らな
かったようですよ」と教えてくれ
た。

それまで自分の云つた事につい
て、その方面の掛念けねんをまるでもつ
ていなかつた私は、彼の言葉を聞

くとひとしく、意外の感に打たれた。

「君はどうしてそんな事を知つてるの」

この疑問に対する彼の説明は簡単であつた。親戚だか知人だか知らないが、何しろ彼に關係のある或家うちの青年が、その学校に通つていて、当日私の講演を聴いた結果を、何だか解らないという言葉で

彼に告げたのである。

「いったいどんな事を講演なすつたのですか」

私は席上で、彼のためにまたそ

の講演の梗こうがいを繰くり返かえした。

「別にむずかしいとも思えない事
だろう君。どうしてそれが解らな
いかしら」

「解らないでしよう。どうせ解りや
しません」

私には断乎^{だんこ}たるこの返事がいかにも不思議に聞こえた。しかしそれよりもなお強く私の胸を打つたのは、止^よせばよかつたという後悔の念であつた。自白すると、私はこの学校から何度となく講演を依頼されて、何度となく断つたのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には、どうかしてそこに集まる聴衆に、相当の利益

を与えたいという希望があった。

その希望が、「どうせ解りやしま

せん」という簡単な彼の一言いちごんで、

みごとに粉碎ふんさいされてしまって見る

と、私はわざわざ浅草まで行く必

要がなかったのだと、自分を考え

ない訳に行かなかつた。

これはもう一二年前の古い話で

あるが去年の秋またある学校で、

どうしても講演をやらなければ義

理が悪い事になって、ついにそこへ行つた時、私はふと私を後悔させた前年を思い出した。それに私の論じたその時の題目が、若い聴衆の誤解を招きやすい内容を含んでいたので、私は演壇を下りる間^{まぎ}際にこう云つた。

「多分誤解はないつもりですが、もし私の今御話したうちに、判然^{はつきり}しないところがあるなら、どしどし

私宅まで来て下さい。できるだけあなたがたに御納得ごなつとくの行くように説明して上げるつもりですから」

私のこの言葉が、どんな風に反響をもたらずだろうかという予期は、当時の私にはほとんど無かつたように思う。しかしそれから四五日経たつて、三人の青年が私の書齋はに這入いつて来たのは事実である。そのうちの二人は電話で私の都合

を聞き合せた。一人は鄭寧ていねいな手紙を書いて、面会の時間を拵じゅうえてくれと注文して来た。

私は快こころよくそれらの青年に接した。そうして彼らの来意を確たしかめた。一人の方は私の予想通り、私の講演についての筋道の質問であったが、残る二人の方は、案外にも彼らの友人がその家庭に対して採とるべき方針についての疑義を私に

訊きこうとした。したがってこれは私の講演を、どう実社会に応用して好いかという彼らの目前せまに逼つた問題を持つて来たのである。

私はこれら三人のために、私の云うべき事を云い、説明すべき事を説明したつもりである。それが彼らにどれほどの利益を与えたか、結果からいうとこの私にも分らない。しかしそれだけにしたところ

で私には満足なのである。「あなた
の講演は解らなかつたそうです」
と云われた時よりも遥はるかに満足な
のである。

「この稿が新聞に出た二三日
あとで、私は高等工業の学生
から四五通の手紙を受取つた。
その人々はみんな私の講演を
聴いたものばかりで、いずれ
も私がここで述べた失望を打

ち消すような事実を、反証として書いて来てくれたのである。だからその手紙はみな好意に充ちていた。なぜ一学生
の云った事を、聴衆全体の意見として速断するかなどという詰問的のものは一つもなかった。それで私はここに一言を附加して、私の不明を謝し、併せて私の誤解を正してくれ

た人々の親切をありがたく思
う旨むねを公けにするのである。」

三十五

私は小供の時分よく日本橋の瀬せと

戸物町ものちようにある伊勢本いせもとという寄席よせへ

講釈を聴きに行つた。今の三越の

向側むこうがわにいつでも昼席の看板がかかつ

ていて、その角かどを曲ると、寄席は

つい小半町行くか行かない右手にあつたのである。

この席は夜になると、色物いろものだけしかかけないので、私は昼よりほかに足を踏み込んだ事がなかつたけれども、席数からいうと一番多く通かよつた所のように思われる。当時私のいた家は無論高田の馬場の下ではなかつた。しかしいくら地理の便が好かつたからと云つて、

どうしてあんなに講釈を聴きに行く時間が私にあつたものか、今考えるとむしろ不思議なくらいである。

これも今からふり返つて遠い過去を眺めるせいでもあろうが、そこは寄席としてはむしろ上品な気分を客に起させるようにできていた。高座こうざの右側みぎわきには帳場格子ちやうばいこうしのような仕切しきりを二方に立て廻して、そ

の中に定連じょうれんの席が設けてあつた。
それから高座こうざの後が縁側えんがわで、その
先がまた庭になつていた。庭には
梅の古木が斜ななめに井桁いげたの上に突き
出たりして、窮屈な感じのしない
ほどの大空が、縁から仰がれるく
らいに余分の地面を取り込んでい
た。その庭を東に受けて離れ座敷
のような建物も見えた。

帳場格子のうちにいる連中は、

時間が余って使い切れない有福な
人達なのだから、みんな相応な服^な
装^りをして、時々呑気^{のんき}そうに袂^{たもと}から
毛^{けぬき}抜^ぬきなどを出して根気よく鼻毛を
抜いていた。そんな長閑^{のどか}な日には、
庭の梅の樹^きに鶯^{うぐいす}が来て啼^なくような
気持もした。

中入^{なかいり}になると、菓子^なを箱入のま
ま茶を売る男が客の間へ配^くって歩
くのがこの席の習慣になつていた。

箱は浅い長方形のもので、まず誰でも欲しいと思う人の手の届く所に一つと云った風に都合よく置かれるのである。菓子の数は一箱に十ぐらいの割だったかと思うが、それを食べたいだけ食べて、後からその代価を箱の中に入れるのが無言の規約になっていた。私はその頃この習慣を珍らしいもののように興がって眺めていたが、今と

なつて見ると、こつした鷹揚おつようで呑のん
気きな気分は、どこの人寄場ひとよせばへ行つ
ても、もう味わう事ができまいと
思うと、それがまた何となく懐なつかし
い。

私はそんなおつとりと物寂ものさびた
空気の中で、古めかしい講釈とい
うものをいろいろの人から聴いた
のである。その中には、すつとこつ
のんのん、ずいずい、などとこつ

妙な言葉を使う男もいた。これは
たなべなんりゆう
田辺南竜と云って、もとはどこか
の下足番であつたとかいう話であ
る。そのすとこ、のんのん、ず
いずいははなはだ有名なものであつ
たが、その意味を理解するものは
一人もなかつた。彼はただそれを
軍勢の押し寄せる形容詞として用
いていたらしいのである。

この南竜はとつくの昔に死んで

しまった。そのほかのものもたいていは死んでしまった。その後の様子をまるで知らない私には、その時分私を喜ばせてくれた人のうちで生きているものがはたして何人あるのだから全く分らなかつた。ところがいつか美音会の忘年会のあつた時、その番組を見たら、吉原のたいこもち幫間の茶番だの何だのが列ならべて書いてあるうちに、私はたつ

た一人の当時の旧友を見出した。

私は新富座へ行つて、その人を見た。またその声を聞いた。そうして彼の顔も咽喉のども昔とちつとも變つていないのに驚ろいた。彼の講釈も全く昔の通りであつた。進歩もしない代りに、退歩もしていなかつた。廿世紀のこの急劇な変化を、自分と自分の周囲に恐ろしく意識しつゝあつた私は、彼の前に坐り

ながら、絶えず彼と私とを、心の
うちで比較して一種の黙想に耽^{ふけ}
っていた。

彼というのは馬^ば琴^{きん}の事で、昔伊^い
勢^も本^とで南竜の中入前をつとめてい
た頃には、琴^{きん}凌^{りょう}と呼ばれた若手だっ
たのである。

私の長兄はまだ大学とならない
前の開成校かいせいこうにいたのだが、肺わづらひを患わづらひつ
て途中で退学してしまった。私と
はだいぶ年齒としが違ちがうので、兄弟と
しての親しみよりも、大人おとな対小供
としての関係の方が、深く私の頭
に浸しみ込こんでいる。ことことに怒おこられ
た時はそうした感じが強く私を刺しげ
戟きしたように思う。

兄は色の白い鼻筋の通った美しく

しい男であつた。しかし顔だちから云つても、表情から見ても、どこかに峻けわしい相そうを具そえていて、むやみに近寄れないと云つた風の逼せまつた心持を他ひとに与よつた。

兄の在学中には、まだ地方から出て来た貢進生こうしんせいなどのいる頃だつたので、今の青年には想像のできないような気風が校内のそここに残つていたらしい。兄は或上級

生に艶書ふみをつけられたと云って、
私に話した事がある。その上級生
というのは、兄などよりもずっと
年齒上としうえの男であつたらしい。こん
な習慣の行なわれない東京で育つ
た彼は、はたしてその文ふみをどう始
末したものだらう。兄はそれ以後
学校の風呂でその男と顔を見合せ
るたびに、きまりの悪い思をして
困つたと云っていた。

学校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終しじゆう堅苦しく構えていたから、父や母も多少彼に気をおく様子が見えた。その上病気のせいでもあるうが、常に陰気臭い顔いんきくさをして、宅うちにばかり引込んでいた。それがいつとなく融とけて来て、人柄ひとがらが自おのずと柔らかになつたと思つと、彼はよく古渡唐棧こわたりとうざんの着物に角帯かくおびなどを締しめて、夕方から宅を

外にし始めた。時々は紫色で亀甲むらさきいろきっこう型がたを一面に摺すった亀清かめせいの団扇うちわなどが茶の間に放ほうり出だされるようになってた。それだけならまだ好いが、彼は長火鉢ながひばちの前すわへ坐すわったまま、しきりに仮色こわいろを遣つかい出した。しかし宅たくのものは別段それとんじやくに頓着とんじやくする様子も見えなかつた。私は無論平気であつた。仮色こわいろと同時に藤八拳とうはちけんも始まつた。しかしこの方ほうは相手が要い

るので、そう毎晩は繰り返されな
かったが、何しろ変に無器用な手
を上げたり下げたりして、熱心に
やっていた。相手はおもに三番目
の兄が勤めていたようである。私
は真面目まじめな顔をして、ただ傍観し
ているに過ぎなかった。

この兄はとうとう肺病で死んで
しまった。死んだのはたしか明治
二十年だと覚えている。すると葬

式も済み、待夜たいやも済んで、まずひと一
片付かたづきというところへ一人の女が尋
ねて来た。三番目の兄が出て応接
して見ると、その女は彼にこんな
事を訊きいた。

「兄さんは死ぬまで、奥さんを御
持ちになりやしますまいね」
兄は病気のため、生涯しょうがい妻帯しな
かった。

「いいえしまいまで独身で暮らし

ていました」

「それを聞いてやっと安心しまし

た。^{わたくし}妾のようなものは、どうせ旦^{だん}

那^ながなくつちや生きて行かれない

から、仕方がありませんけれども、

……」

兄の遺骨の埋^うめられた寺の名を

教^{おす}わつて帰って行ったこの女は、

わざわざ甲州から出て来たのであ

るが、元柳橋の芸者をしている頃、

兄と関係があつたのだという話を、
私はその時始めて聞いた。

私は時々この女に会つて兄の事
などを物語つて見たい気がしない
でもない。しかし会つたら定めし
御婆おばあさんになつて、昔とはまるで
違つた顔をしていはしまいかと考
える。そうしてその心もその顔同
様に皺しわが寄つて、からからに乾い
ていはしまいかとも考える。もし

そうだとすると、^{かのおんな}彼女が今になつて兄の弟の私に会うのは、彼女にとつてかえつて辛い^{つらい}悲しい事かも知れない。

三十七

私は母の記念のためにこころで何か書いておきたいと思うが、あいにく私の知っている母は、私の頭

に大した材料を遺^{のこ}して行つてくれ
なかつた。

母の名は千枝^{ちえ}といつた。私は今
でもこの千枝という言葉^{なつ}を懐かし
いものの一つに数えている。だか
ら私にはそれがただ私の母だけの
名前で、けつしてほかの女の名前
であつてはならないような気がす
る。幸いに私はまだ母以外の千枝
という女に出会つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだの
だけれども、私の今遠くから呼び
起す彼女の幻像は、記憶の糸をい
くら^{たど}辿つて行つても、御婆さんに
見える。晩年に生れた私には、母
の水々しい姿を覚えている特権が
ついに与えられずにしまったので
ある。

私の知っている母は、常に大き
な^{めがね}眼鏡をかけて裁縫^{しごと}をしていた。

その眼鏡は鉄縁の古風なもので、
球たまの大きさが直径さしわたし二寸以上もあつ
たように思われる。母はそれをか
けたまま、すこしあご顎を襟元えりもとへ引き
つけながら、私をじつと見る事が
しばしばあつたが、老眼の性質を
知らないその頃の私には、それが
ただ彼女の癖とのみ考えられた。
私はこの眼鏡と共に、いつでも母
の背景になつていた一いっけん間の襖ふすまを想おも

い出^だす。古^{ふる}びた張^{はり}交^{まぜ}の中^{うち}に、生^{しょう}死^じ
事^じ大^{だい}無^む常^{じょう}迅^{じん}速^{そく}云^{ぐん}々^{そく}と書^かいた石^{いし}摺^{すり}な
ども鮮^{あざ}やかに眼^{まなこ}に浮^うんで来^きる。

夏^{なつ}になると母^{はは}は始^し終^{しゅう}紺^{こん}無^む地^じの紹^ろ
の帷^{かた}子^{びら}を着^きて、幅^{あし}の狭^{せま}い黒^{くろ}繻^{じゆ}子^すの
帯^{おビ}を締^しめていた。不^ふ思^し議^ぎな事^{こと}に、

私^{わたし}の記^き憶^いに残^{のこ}つてい^る母^{はは}の姿^{すがた}は、
いつでもこの真^ま夏^{なつ}の服^{ふく}装^{なり}で頭^{あたま}の中^{うち}
に現^あわ^るるだけな^{ので}、それ^{から}
紺^{こん}無^む地^じの紹^ろの着^き物^{ぶつ}と幅^{あし}の狭^{せま}い黒^{くろ}繻^{じゆ}

子の帯を取り除くと、後に残るものはただ彼女の顔ばかりになる。

母がかつて縁鼻^{えんばな}へ出て、兄と暮^ぐを打っていた様子などは、彼ら二人を組み合わせた凶柄^{ずがら}として、私の胸に収めてある唯一^{ゆいいつ}の記念^{かたみ}なのだ
が、そこでも彼女はやはり同じ帷^{かた}子^{びら}を着て、同じ帯を締^しめて坐っているのである。

私はついで母の里へ伴^つれて行か

れた覚おぼえがないので、長い間母がどこから嫁に来たのか知らずに暮らしていた。自分から求めて訊ききたがるような好奇心はさらになかった。それでその点もやはりぼんやり霞かすんで見えるよりほかに仕方がないのだが、母が四よツ谷大番町やおおばんまちで生れたという話だけは確たしかに聞いていた。宅うちは質屋であつたらしい。蔵いが幾戸前いとまえとかあつたのだと、か

つて人から教えられたようにも思うが、何しろその大番町という所を、この年になるまで今だに通つた事のない私のことだから、そんな細かな点はまるで忘れてしまった。たといそれが事実であつたにせよ、私の今もっている母の記念のなかに蔵屋敷などはけっして現われて来ないのである。おおかたその頃にはもう潰つぶれてしまったの

だろう。

母が父の所へ嫁にくるまで御殿奉公をしていたという話も臆おぼろげ気に覚えていたが、どここの大名の屋敷へ上つて、どのくらい長く勤めていたものか、御殿奉公の性質さえよく弁わきまえない今の私には、ただ淡あわい薫かおりを残して消えた香こけのようなもので、ほとんどとりとめようのない事実である。

しかしそう云えば、私は錦絵にしきえに描かいた御殿女中の羽織はねおりっているよ
うな華美はでな総模様の着物を宅の蔵
の中で見た事がある。紅絹裏もみうらを付
けたその着物の表には、桜だか梅
だかが一面に染め出されて、ここ
ろどころに金糸や銀糸の刺繡ぬいも交まじっ
ていた。これは恐らく当時の裯かいどり
とかいうものなのだろう。しかし
母がそれを打ち掛けた姿は、今想

像してもまるで眼に浮かばない。

私の知っている母は、常に大きな老眼鏡をかけた御婆さんであつたから。

それのみか私はこの美しい襦褌ごこがいまきがその後小搔巻ごこがいまきに仕立直されて、その頃宅にできた病人の上に載せられたのを見たくらいだから。

私が大学で教おすわつたある西洋人
が日本を去る時、私は何か餞せんべつ別を
贈ろうと思つて、宅の蔵たくまきから高時
絵えの緋ひの房ふさの付いた美しい文箱ふばこを
取り出して来た事も、もう古い昔
である。それを父の前へ持つて行つ
て貰い受けた時の私は、全く何の
気もつかかなかつたが、今こうして
筆を執とつて見ると、その文箱も小
搔卷に仕立直された紅絹裏の裨褙

同様に、若い時分の母の面影を濃おもかげ こまやかに宿しているように思われてな
らない。母は生涯父から着物を拵しゅうがい じしら
えて貰った事がないという話だが、
はたして拵えて貰わないでもすむ
くらいな支度したくをして来たものだろ
うか。私の心に映るあの紺無地の
紹ろの帷子かたびらも、幅の狭い黒繻子くろじゆすの帯
も、やはり嫁に来た時からすでに
箆笥たんすの中にあつたものなのだろう

か。私は再び母に会って、万事を
こどごとく口ずから訊きいて見たい。
悪戯いたずらで強情な私は、けっして世
間の末すえツ子このように母から甘く取
扱あつかかわれなかつた。それでも宅中うちじゅう
で一番私を可愛かわいがつてくれたもの
は母だという強い親しみの心が、
母に対する私の記憶の中うちには、い
つでも籠こもっている。愛憎を別にし
て考えて見ても、母はたしかに品

位のある床ゆかしい婦人に違なかつた。
そうして父よりも賢かしこそうに誰の
目にも見えた。気むずかしい兄も
母だけには畏敬いけいの念を抱いだいていた。
「御母おつかさんは何にも云わないけれ
ども、どこかに怖こわいところがある」
私は母を評した兄のこの言葉を、
暗い遠くの方から明らかに引張出ひっぱりだ
してくる事が今でもできる。しか
しそれは水に融とけて流れかかった

字体を、きつとなつてやつと元の
形に返したような際きわどい私の記憶
の断片に過ぎない。そのほかの事
になると、私の母はすべて私にとつ
て夢である。途切とぎれ途切とぎれに残つ
ている彼女の面影おもかげをいくら丹念に
拾い集めても、母の全体はとても
髣髴ほうふつする訳に行かない。その途切とぎれ
途切に残っている昔さえ、半なかば以
上はもう薄れ過ぎて、しつかりと

は掴つかめない。

或時私は二階へ上あがつて、たつた
一人で、昼寝をした事がある。そ
の頃の私は昼寝をすると、よく変
なものに襲われがちであつた。私
の親指が見る間に大きくなつて、
いつまで経たつても留らなかつたり、
あるいは仰向あおもむきに眺ながめている天井てんじょうが
だんだん上から下りて来て、私の
胸おさを抑おさえついたり、または眼あを開あ

いて普段と変わらない周囲を現に見
ているのに、からだ身体だけが睡魔の擒とりこ
となつて、いくらもがいても、手
足を動かす事ができなかつたり、
後で考えてさえ、夢だか正気だか
訳の分らない場合が多かつた。そ
うしてその時も私はこの変なもの
に襲われたのである。

私はいつどこで犯した罪か知ら
ないが、何しろ自分の所有でない

金銭を多額に消費してしまった。

それを何の目的で何に遣ったのか、

その辺も明瞭でないけれども、小

供の私にはとても償う訳に行かな

いので、気の狭い私は寝ながら大

変苦しみ出した。そうしてしまい

に大きな声を揚げて下にいる母を

呼んだのである。

二階の梯子段は、母の大眼鏡と

離す事のできない、生死事大無常

迅速じんそく云々と書いた石摺いしずりの張交はりまぜにしてある襖ふすまの、すぐ後うしろについているので、母は私の声を聞きつけると、すぐ二階へ上つて来てくれた。私はそこに立って私を眺めている母に、私の苦しみを話して、どうかして下さいと頼んだ。母はその時微笑しながら、「心配しないでもいいよ。御母おつかさんがいくらでも御金を出して上げるから」と云って

くれた。私は大変嬉うれしかった。それで安心してまたすやすや寝てしまった。

私はこの出来事が、全部夢なのか、または半分だけ本当なのか、今でも疑っている。しかしどうしても私は実際大きな声を出して母に救を求め、母はまた実際の姿を現いわして私に慰藉しやの言葉を与えてくれたとしか考えられない。そう

してその時の母の服装は、いつも
私の眼に映る通り、やはり紺無地
の紹ろの帷子かたびらに幅の狭い黒繻子くろじゆすの帯
だつたのである。

三十九

今日は日曜なので、小供が学校
へ行かないから、下女も気を許し
たものと見えて、いつもより遅く

起きたようである。それでも私の床を離れたのは七時十五分過であった。顔を洗ってから、例の通り焼た。麵麩ストと牛乳と半熟の鶏卵たまごを食べて、かわ厠ちに上ろうとすると、あいにこい肥取とりが来ているので、私はしばらく出た事のない裏庭の方へ歩を移した。すると植木屋が物置の中で何か片づけものをしていた。不要の炭俵を重ねた下から威勢の好い火

が燃えあがる周囲に、女の子が三人ばかり心持よさそうに燂を取っている様子が私の注意を惹いた。

「そんなに焚火たきびに当たると顔が真黒になるよ」と云ったら、末の子が、「いやあーだ」と答えた。私は石垣の上から遠くに見える屋根瓦やねがわらの融とけつくした霜しもに濡ぬれて、朝日にきらつく色を眺めたあと、また家うちの中へ引き返した。

親類の子が来て掃除そうじをしている
書斎の整頓するのを待つて、私は
机を縁側えんがわに持ち出した。そこで日
当りの好い欄干らんかんに身を靠もたせたり、
頬杖ほおづえを突いて考えたり、またしば
らくはじつと動かずにただ魂を自
由に遊ばせておいてみたりした。

軽い風が時々鉢植はちうえの九花蘭きゅうからんの長
い葉を動かしてきた。庭木の中で
鶯うぐいすが折々下手な囀ねえりを聴かせた。

毎日硝子戸ガラスどの中に坐すわっていた私は、
まだ冬だ冬だと思っっているうちに、
春はいつしか私の心を蕩揺とうようし始め
たのである。

私の冥想めいそうはいつまで坐すわっていて
も結晶しなかった。筆をとって書
こうとすれば、書く種は無尽蔵に
あるような心持もするし、あれに
しようか、これにしようかと迷い
出すと、もう何を書いてもつまら

ないのだという呑気のんきな考も起つてきた。しばらくそこで佇たたずんでいるうちに、今度は今まで書いた事が全く無意味のように思われ出した。なぜあんなものを書いたのだろうという矛盾が私を嘲弄ちやうごころいし始めた。ありがたい事に私の神経は静まっていた。この嘲弄の上に乗ってふわふわと高い冥想めいそうの領分のぼに上って行くのが自分には大変な愉快に

なつた。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下^{みおろ}して笑いたくなくなつた。私は、自分で自分を軽蔑^{けいべつ}する気分に揺られながら、揺籃^{ようらん}の中で眠^{ねむ}る小供に過ぎなかつた。

私は今まで他^{ひと}の事と私の事を「ちやごちや」に書いた。他の事を書くときは、なるべく相手の迷惑にならないようにとの掛念^{けねん}があつた。私の身の上を語る時分には、

かえって比較的自由的な空気の中に
呼吸する事ができた。それでも私
はまだ私に対して全く色気を取り
除き得る程度に達していなかつた。
嘘^{うそ}を吐^ついて世間を欺^{あざむ}くほどの衒^{げん}気
がないにしても、もつと卑^{いや}しい所、
もつと悪い所、もつと面目を失す
るような自分の欠点を、つい発表
しずにした。聖オーガスチン
の懺悔^{ざんげ}、ルソーの懺悔、オピアム

イーターの懺悔、それをいく
ら辿^{たど}つて行つても、本当の事實は
人間の力で叙述できるはずがない
と誰かが云つた事がある。まして
私の書いたものは懺悔ではない。
私の罪は、もしそれを罪と云
い得るならば、すこぶる明る
いところからばかり写されていた
だろう。そこに或人は一種の不快
を感ずるかも知れない。しかし私

自身は今その不快の上に跨またがって、
一般の人類をひろく見渡しながら
微笑しているのである。今までつ
まらない事を書いた自分をも、同
じ眼で見渡して、あたかもそれが
他人であつたかの感を抱いだきつつ、
やはり微笑しているのである。

まだ鶯うぐいすが庭で時々鳴く。春風が
折々思い出したように九花蘭きゅうからんの葉
を揺うごかしに来る。猫がどこかで痛いた

く噛かまれた米噛こめかみを日に曝さらして、あ
たたかそうに眠ねっている。先刻さつきま
で庭にわで護謨ゴムふうせん風船ふうせんを揚あげて騒さわいでい
た小供こども達は、みんな連れ立つれだって活
動写真かどうしやうしんへ行いってしままった。家も心
もひっそりとしたうちうちに、私は硝ガラ
子戸スドを開ひけ放はなつて、静しずかな春はるの光
に包つつまれながら、恍惚うつとりとこの稿こうを
書き終おるのである。そうした後のちで、
私はちよちつと肱ひじを曲まげて、この縁えん

側^がに 一眠り眠るつもりである。

(二月十四日)

底本：「夏目漱石全集10」ちく
ま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7

月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏
目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4

月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年8月22日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネット

の図書館、青空文庫（[http:](http://www.aozora.gr.jp/)

[/ / www . a o z o r a . g r](http://www.aozora.gr.jp/)

[j p /](http://www.aozora.gr.jp/)）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボラ

ンティアの皆さんです。